

陶器千塚・陶器遺跡発掘調査概要・Ⅱ

2006年3月

大阪府教育委員会



はじめに

大阪府の西南部にある泉北丘陵は戦後に発展した新しい町として、鉄道や高速道路が縦貫し、大規模にニュータウンが開発されました。その北側の台地に位置する陶器千塚・陶器遺跡は、府内では数少なくなった田園風景が残り、ため池の保全や活用も試みられています。

現在の状況に対し、今から1500年以上前の古墳時代、泉北丘陵一帯から北側の台地にかけては半島から渡来した陶工を中心に、窯で焼き物をつくる町として、現在とは違った発展を遂げていたのです。

泉北ニュータウンの開発にともなう昭和40年代から続けられた発掘調査では、約600基の窯跡と焼き損じた大量の須恵器や、それを支えた人たちの集落・墳墓などが明らかにされました。北側台地の陶器遺跡・陶器千塚も古墳時代後期から奈良時代にかけて、焼き物の町として須恵器づくりがつつげられていたことがこれまでの発掘調査などによって判明しました。

陶器千塚・陶器遺跡の地域では須恵器づくりが終焉した平安時代以降にも遺構・遺物が発見されることから、発展を遂げていたことが明らかにされつつあります。特に、この地域は中世末期、関が原合戦の恩賞などで岸和田城主の一族が領地として開発し、明治維新まで小出陶器藩の所領となって新田開発が進められました。

今回調査でも古墳時代から平安時代にかけての須恵器づくりの遺構・遺物と、その後の鎌倉時代・室町時代に集落が展開していく様相、さらに戦国時代から江戸時代になって本格的に水田開発が進められていく様相などが明らかにされました。

以上は地域の開発や文化をより鮮明にする成果であるほか、これまであまり知られていなかった歴史的景観を復元する上で大きな貢献を果たすことができると考えます。

最後に、調査・整理にご協力、ご指導いただきました関係各位にお礼申し上げますとともに、今後とも文化財行政に一層ご理解を賜りますよう、お願い申し上げます。

平成18年3月31日

大阪府教育委員会
文化財保護課長 丹上 務

例 言

1. 本書は府営集落基盤整備事業「陶器北地区」予定地内で実施された陶器千塚・陶器遺跡発掘調査の概要報告書である。調査は大阪府環境農林水産部から依頼を受け、大阪府教育委員会が実施した。本調査の調査番号は04008である。
2. 現地調査は文化財保護課調査第二グループ技師、西川寿勝を担当として、陶器北地区内の八田地区（陶器遺跡）と住区地区（陶器遺跡・陶器千塚）を平成16年6月～17年3月に実施した。遺物整理は現地調査と並行してはじめ、調査管理グループ林日佐子・西川寿勝・藤田道子を担当者として実施し、平成18年3月末に終了した。
3. 本書の執筆・編集は西川が行い、一部は渡辺晴香・佐々木健太郎（本府調査員）による。
4. 本調査の航空写真測量は（株）かんこうに委託して実施した。なお、撮影フィルムは上記の委託会社において保管している。また、遺物写真は有限会社阿南写真工房に委託して撮影した。
5. 本文・挿図に用いた標高は東京湾標準潮位（T. P. 値）を示す。また、座標値は国土地院院第Ⅵ系による新座標で、方位は座標北を指す。
6. 発掘調査・遺物整理及び本書の作成に要した経費は農林水産省の補助を受けた大阪府環境農林水産部と文部科学省の補助を受けた大阪府教育委員会が負担した。報告書は300部作成し、一部あたりの単価は1,224円である。

目 次

はじめに 例言 目次

第Ⅰ章 調査計画	1. 位置と環境 (西川)	1
	2. 調査の経緯 (西川)	5
	a これまでの調査と地区設定	
	b 基本層序と遺構の図化	
第Ⅱ章 発掘調査	1. 現地調査 (佐々木・西川)	7
	a 1区の調査	
	b 2区の調査	
	c 8区の調査	
	d 3・4区の調査	
	e 5・6区の調査	
	f 7区の調査	
	2. 出土遺物 (渡辺・西川)	33
	a 古墳時代後期以前の遺物 (1～8区)	
	b 古墳時代後期の遺物 (1区)	
	c 古墳時代後期の遺物 (2区)	
	d 古墳時代後期の遺物 (3～8区)	
	e 古代の遺物 (1～8区)	
	f 中世の遺物 (1～8区)	
	g 近世の遺物 (1～8区)	
第Ⅲ章 まとめ (西川・渡辺・佐々木)		68
発見遺物対照表 (渡辺)		69

挿 図 ・ 図 版 目 次

<p>図1 周辺遺跡分布図2</p> <p>図3 調査区地区割図4</p> <p>図5 1 a・1 b区遺構図8</p> <p>図7 1 d区遺構図10</p> <p>図9 建物1-2平面および断面図12</p> <p>図11 2区遺構図16</p> <p>図13 建物2-2平面および断面図18</p> <p>図15 8区遺構図22</p> <p>図17 1区出土陶棺24</p> <p>図19 5・6区遺構図28</p> <p>図21 6区出土古墳時代中期須恵器杯身30</p> <p>図23 7区遺構図32</p> <p>図25 1区出土磁石34</p> <p>図27 1・2区出土須恵器乾燥台35</p> <p>図29 1区出土須恵器(2)38</p> <p>図31 1区出土須恵器(4)40</p> <p>図33 1区出土須恵器(6)42</p> <p>図35 1区出土須恵器(8)44</p> <p>図37 1区出土須恵器(10)46</p> <p>図39 1区出土須恵器(12)48</p> <p>図41 1区出土須恵器(14)50</p> <p>図43 2区出土須恵器(2)54</p> <p>図45 2区出土須恵器(4)56</p> <p>図47 2区出土須恵器(6)58</p> <p>図49 4~7区出土須恵器(2)61</p> <p>図51 中世の遺物(1)64</p> <p>図53 近世の遺物67</p> <p>図版表紙 1・2区出土須恵器集合</p> <p>図版2 3~6区全景</p> <p>図版4 須恵器器種別集合(1)</p> <p>図版6 須恵器器種別集合(3)</p> <p>図版8 中世・近世の遺物</p>	<p>図2 これまでの調査区位置図3</p> <p>図4 地区割概念図6</p> <p>図6 1 c・1 e区遺構図9</p> <p>図8 建物1-1平面および断面図11</p> <p>図10 1区の土坑平面および断面図13</p> <p>図12 建物2-1平面および断面図17</p> <p>図14 2区の土坑平面および断面図19</p> <p>図16 建物8-1平面および断面図23</p> <p>図18 3・4区遺構図26</p> <p>図20 6区方形区画平面および断面図29</p> <p>図22 古代の須恵器31</p> <p>図24 サヌカイト製打製石器33</p> <p>図26 1・2区出土土師器小壺34</p> <p>図28 1区出土須恵器(1)37</p> <p>図30 1区出土須恵器(3)39</p> <p>図32 1区出土須恵器(5)41</p> <p>図34 1区出土須恵器(7)43</p> <p>図36 1区出土須恵器(9)45</p> <p>図38 1区出土須恵器(11)47</p> <p>図40 1区出土須恵器(13)49</p> <p>図42 2区出土須恵器(1)53</p> <p>図44 2区出土須恵器(3)55</p> <p>図46 2区出土須恵器(5)57</p> <p>図48 4~7区出土須恵器(1)60</p> <p>図50 8区出土須恵器62</p> <p>図52 中世の遺物(2)65</p> <p>報告書抄録73</p> <p>図版1 1・2区全景</p> <p>図版3 5~8区全景</p> <p>図版5 須恵器器種別集合(2)</p> <p>図版7 打製石器・磁石・中世陶磁器</p>
--	---

第Ⅰ章 調査計画

1. 位置と環境

陶器千塚・陶器遺跡は大阪府南西部、泉北丘陵の北側に位置する台地上にある(図1)。泉北丘陵から北側の台地にかけては陶器川・前田川・石津川・和田川などが南東から北西に向かって流れ、いくつかに分断される。水系は下流で石津川に合流し、大阪湾に注ぐ。

石津川下流は北側が百舌鳥古墳群、南側が四ツ池遺跡となる。石津は巨大古墳造営の物流拠点とされていたほか、上流で作られた須恵器を発信する交易の拠点ともなっていたと考える。

そして、石津川の中流域は陶器遺跡・陶器南遺跡をはじめ、小阪遺跡・伏尾遺跡・大庭寺遺跡・野ノ井遺跡など、須恵器づくりに関連する集落が水系ごとに営まれた。また、集落の周辺には陶器千塚・田園百塚・小代古墳群・野ノ井古墳群・牛石古墳群・信太千塚などの群集墳が営まれた。これらの古墳群には多彩な須恵器の副葬が認められることはもちろん、須恵器大甕を主体部とする古墳、特殊な須恵質の土管状の棺を主体部にするものなど、独特の埋葬形態が目目できる。

中でも、陶器千塚は「カマド塚」と呼ばれる丸太を骨組みに粘土を張って壁を作り出した木芯粘土室を主体部にもつ古墳や、主体部を焼成した古墳が営まれていたことで、須恵器工人との技術的かかわりがうかがわれる。

石津川の上流域には陶邑窯跡群が展開する。窯は水系ごとに陶器山地区・高倉寺地区・富蔵地区・梅地区・光明池地区・大野池地区などと分けられ、主に水系の南西斜面に窯が築かれている。水系の谷間を通して吹き上げる海風を利用したためと考える。

当初、陶邑窯の操業は高倉寺地区の支群の中心に最古段階の73号窯や85号窯が発見されたことにより、中心から辺縁に拡大していく図式が予想された。ただし、もっとも古い窯が朝鮮半島の技術を直接模倣したものではなく、日本化が進んでいることを理由に、窯の技術導入は多元論、あるいは更なる導入期の窯跡群が想定された。

ところが、泉北丘陵の先端周辺にある大庭寺遺跡・狐池南遺跡・観音寺遺跡などから導入期の須恵器窯が発見されるにいたり、中流域から上流に向かって窯群の拡大する図式が明確になってきた。さらに、これらの須恵器の特徴から、朝鮮半島の技術は直接に陶邑へ導入された実態も明白となりつつある。導入期の須恵器窯は各地にあるとしても、生産を軌道に乗せ、全国的な供給を陶邑窯跡群が担っていたことは否めない状況にある。

さて、これまでに陶邑の陶器山地区では最古段階の須恵器窯が発見されていない。立地的な制約であるという見方もあるが、連続と操業が続く実態から見て、やはり導入期の窯がどこにあったのではないかと予測する。

須恵器窯と工人集落は古代になっても継続する。しかし、律令体制に移行した段階の画期や管理していた役所跡などは発見されていない。飛鳥・奈良の都城と地方の公的な施設への大規模供



图1 周边遗址分布图

給のみならず、硯や仏具といった律令や仏教の必需品ともいえる器物を管理する体制は解明されていない。和泉は奈良時代後期以降、潤として、須恵器を貢納していたことが文献史料よりうかがえる。陶器山地区の工人集落はその頃にはみられず、体制の変化を裏付けるものだろう。

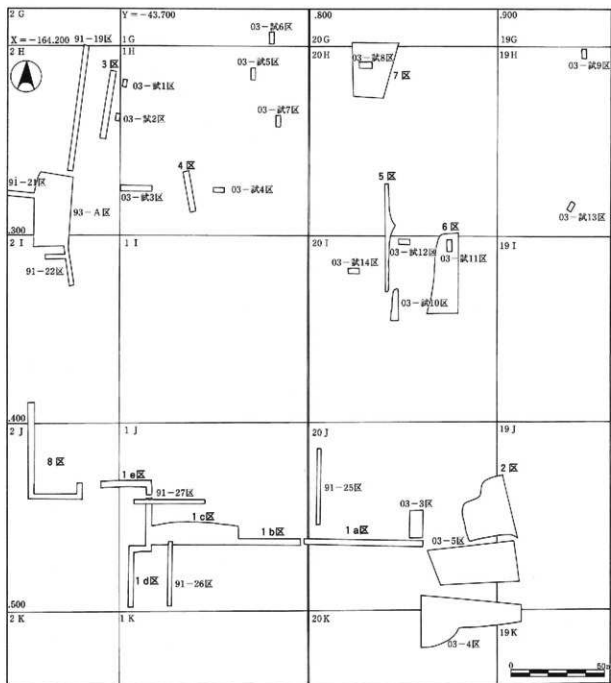


図3 調査区地区割図

2. 調査の経緯

a. これまでの調査と地区設定

調査地周辺では継続してほ場整備事業が実施され、それに伴い広範囲に発掘調査が実施されてきた。調査面積は累計すると約45000㎡に及ぶ。

今回の調査は陶器遺跡と陶器千塚が接する地点にあたる。すなわち、陶器遺跡は集落遺跡として、陶器千塚は埋没した墳墓群がある地域として範囲設定されており、集落域と墓域が重複する、という意味である。調査地はほ場整備事業に伴うきり土部分を調査、盛り土部分を埋没保存としたため、開発地域のうち、調査地は不定形で複雑な形となり、1～8区に別れる。なかでも、1区は水路による開発部分が長く取り付く広範囲である。調査面積は合計2300㎡を測る(図2・3)。

さて、大阪府教育委員会・大阪府文化財センターの発掘調査は調査区の位置を共通して表現できるように、大阪府発行1/10000地形図を基準として4段階の区分を実施している(図3・4)。第Ⅰ区画は南西隅を基準として縦軸をA～O、横軸を0～8に区画する。陶器千塚・陶器遺跡はE5区内にある。第Ⅱ区画は第Ⅰ区画の南西隅を基準として16等分したもので縦1500m、横2000mの範囲である。陶器遺跡は10・11区内にある。第Ⅲ区画は第Ⅱ区画を100m方眼で区画し、北東隅を基準として縦軸を1～20、横軸をA～Oに区分したものである。

今回調査地は1区が1Jに2区が20Jに、3区が2Hに5・6区が20Iなどにあたる。第Ⅳ区画は第Ⅳ区画を10m方眼で区画し、北東隅を基準として縦軸をa～j、横軸を1～10に区分したものである。例えば、今回調査区の一つはE5-10-1J-1aなどと表記される。

特筆すべきこととして、2003年度から座標値が国際基準に基づく新座標に変更されたことである。これまでの調査で示されている座標値は南に約730m、東に約550mずれる。これにともなって座標値から導かれた地区割の表記も変更となっている。

b. 基本層序と遺構の図化

これまでの調査では表土(水田耕作土)と遺物包含層(水田床土)に覆われた地山上に遺構が切り込まれた形で発見されている。したがって、調査は表土を機械掘削で除去し、遺物包含層を人力掘削して遺構の検出に努めることとした。ただし、部分的に表土下に整地土層が確認される場合があり、この部分については遺物の有無を確かめながら機械掘削した。

水田耕作土は黒褐色で現在も耕作に使われているものである。水田床土は灰褐色・淡褐色などで砂利を含み、粘質は高い。水田床土としての灰褐色・淡褐色中には多くの遺物が包含される。層厚は0.5mをこえず、おしなべて0.2m程度である。

これを除去すると、地山直上に茶褐色のマンガン沈着層が薄く見られ、その下に地山がある。地山は黄褐粘土で砂利をよく含むところと、ほとんど含まないところがある。地山は締りがよく、乾燥すると非常に堅い。遺構は地山に刻まれたもののみ検出された。したがって、古い遺構の上表面は地山とともに削平を受け、深い遺構のみ、明瞭に残されていると考える。

遺構の埋め土は茶褐土や暗褐土が多く、地山の色合い・質感と比較して、明快に区別できる。ただし、新旧の遺構の埋め土はほとんど色合い・質感に差がなく、人為的に埋められたもの、流水を伴う堆積のみ明瞭にできた。

また、場所によって遺物包含層は、須恵器の包含密度が非常に高い。現在の水路を含め、中世・近世の遺構埋め土にも数多くの須恵器が含まれている。したがって、須恵器の出土をもって遺構の年代を明確にすることに躊躇させられる。古墳時代の集落で選別されたり、蓄積されたり、捨てられた須恵器は地上に山積みになっていた可能性が高く、後の時代になっても埋没することなく、露呈したのではないだろうか。これらは後世の耕作などで除去されたり、土坑などに埋め捨てられたものが多いと考える。

検出された遺構は航空測量によって1/20で迅速に図化を行った。これまでの調査標定点と合わせ3級基準点を設置し、そこから調査区周縁に4級基準点を設けて地区割をすることとした。遺構・遺物が多数検出された場合は基準点から遺物とりあげ、グリッドを細かく設定した。遺構の密度が低く、遺物も遊離・散在していた3・4区の調査については今回地区を設定しなかった。

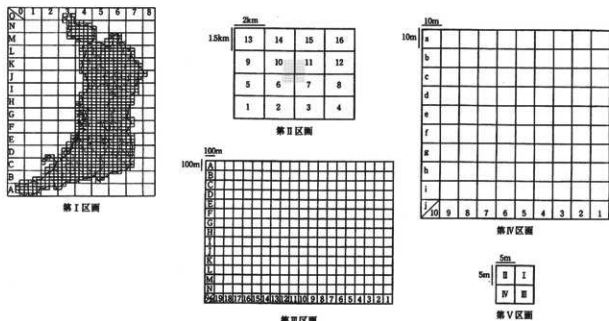


図4 地区割概念図

第二章 発掘調査

1. 現地調査

a. 1区の調査 (図版1)

1区は今回調査範囲の南に位置する。水路工事に先立って調査する部分を含み、東西に約170mと細長い。調査はさらに1a区～1d区と五区分した(図3)。1a区と1d区でそれぞれ六世紀後半の掘立柱建物が確認され、他にも溝や土坑などが確認された。以下に、調査区ごとに詳細を示す。

1a区は1区の東端に位置する東西約60mの調査区である(図5)。03年度の調査区と東端で接する。しかし、連続する遺構は確認されなかった。発見された遺構は掘立柱建物・溝・土坑などである。

掘立柱建物1-1は1a区西端に位置し、建物の北側2×1間のみを検出した。主軸は地形にそってややふれる南北棟である(図8)。桁行は約2m間隔、梁間は約2mを測る。柱穴は一辺0.4～0.5m程度の隅丸方形で深さは約0.2～0.28mしか残されていない。掘り方は暗褐色土に覆われ、灰褐色粘土の柱痕跡を四つ残す。柱の抜き取りが明瞭なものではなかった。

溝1-50は調査区東端から西に約8m離れた所で確認された長さ1.6m以上、幅約0.6mの南北溝である。南側は調査区外へと続く(図5)。

溝1-51は溝1-50から西に約1.6m離れた所で確認された長さ2.8m以上、幅約0.4mの南北溝である。両端は調査区外へと続く(図5)。

溝1-52は溝1-51から西に約2m離れた所で確認された長さ1.4m以上、幅約0.4mの東西溝である。北側は調査区外へと続く(図5)。

溝1-65は溝1-51から西に約1.2m離れた所で確認された長さ1.8m以上、幅約0.4mの東西溝である。北側は調査区外へと続く(図5)。

溝1-50～52・1-65は溝幅が約0.4～0.6mとほぼ共通し暗褐色粘土に覆われ、ほぼ等間隔に平行して掘削されていることから耕作に伴う索掘り溝であると考えられる。

溝1-53は1a区のほぼ中央で確認された長さ2.8m以上、最長幅約9.8m、最短幅約4.4m、深さ約0.5mの不定形の溝である。溝の両岸にテラスがあり、流水堆積を示す大溝である。西側のテラスには土坑が二つ確認され、六世紀後半の須恵器が大量に発見された(図5)。

溝1-66は溝1-53の西側に確認された長さ3.0m以上、幅約0.3mの南北溝である。溝1-54と調査区北端で接しており、溝1-54に対して平行ではなく、軸をやや西にむける(図5)。

溝1-54は溝1-66に接して確認された長さ2.8m以上、幅約0.6m、深さ0.1mの南北溝である。埋め土は炭混じりの暗褐色土で中国製青磁碗が発見された。溝は南北が調査区外へと続く(図5)。

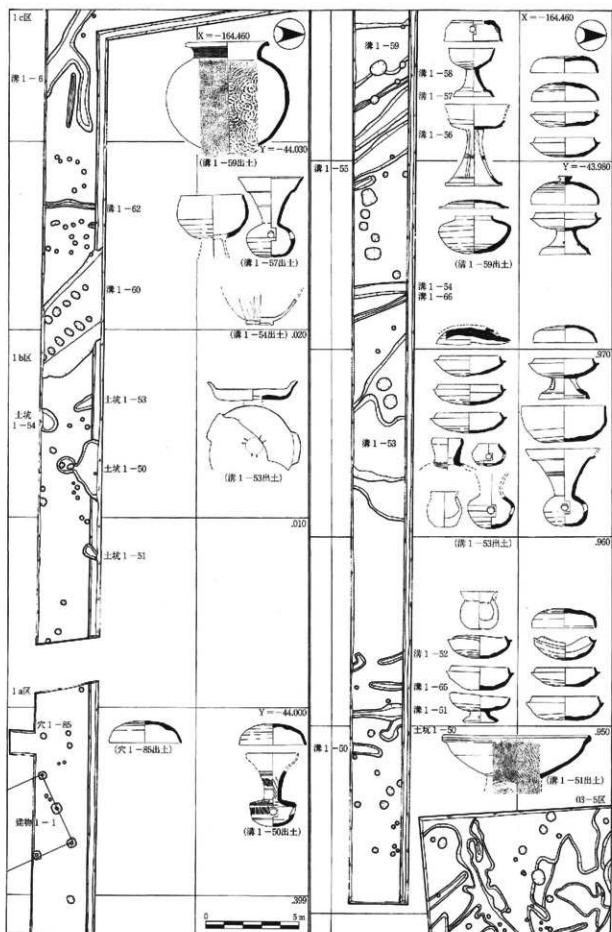


图5 1a·1b区遺構図

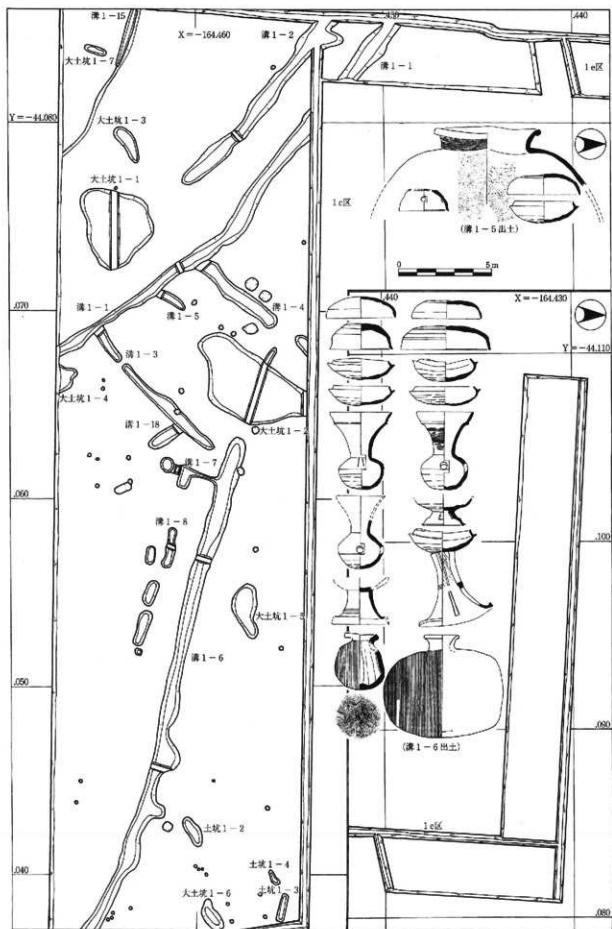


图6 1c·1e区遺構図

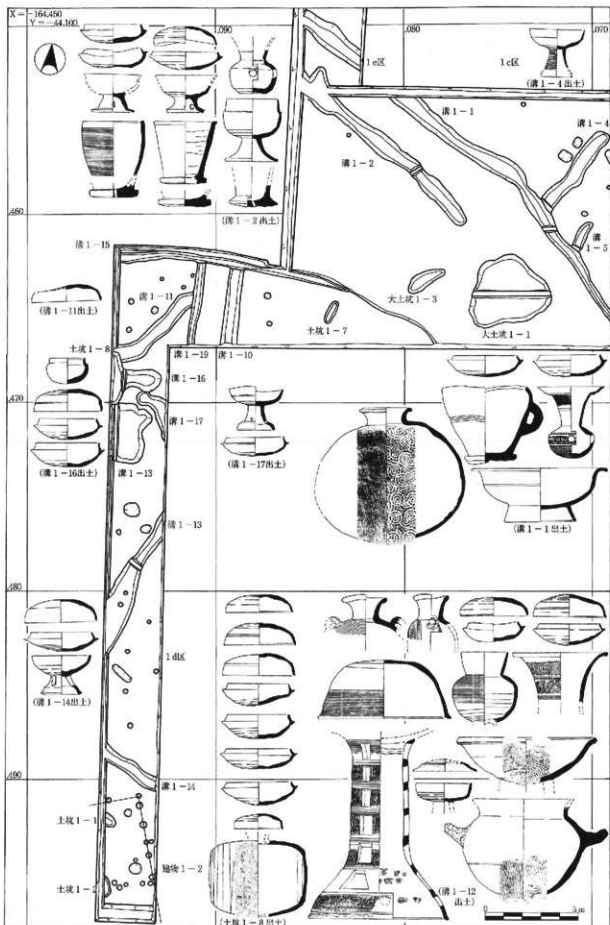


图 7 1d区遗址图

溝1—55は1 a区西半で確認された長さ1.2m以上、幅約0.5mの南北溝である。軸をやや西にむける。南側が調査区外へと続く(図5)。

溝1—56は溝1—55に隣接して確認された長さ3.6m以上、幅約1.5mの南北溝である。軸をやや西にむける。両端が調査区外へと続く(図5)。

溝1—57は溝1—56に隣接して確認された長さ3.6m以上、幅約0.8mの南北溝である。軸をやや西にむける。溝1—56に併行して確認された(図5)。

溝1—58は溝1—57に隣接して確認された長さ3.2m以上、幅約0.3mの南北溝である。軸をやや西にむける。二つのピットに切られる(図5)。

溝1—59は溝1—58に隣接して確認された長さ3.2m以上、幅約2.8m、深さ約0.5mの南北大溝である。軸をやや西にむける。東側を土坑や小穴により削平をうける。西側は地形に沿って一段低くなり、溝の西肩は判然としない。暗褐色粘土で覆われ、上面を削平した地山粘土もみられた。六世紀後半の須恵器が大量に含まれていた(図5)。

土坑1—50は溝1—51に接して確認された。長辺約1m、深さ0.1mの不定形土坑である。六世紀後半の須恵器蓋杯・甕などが発見された(図5)。

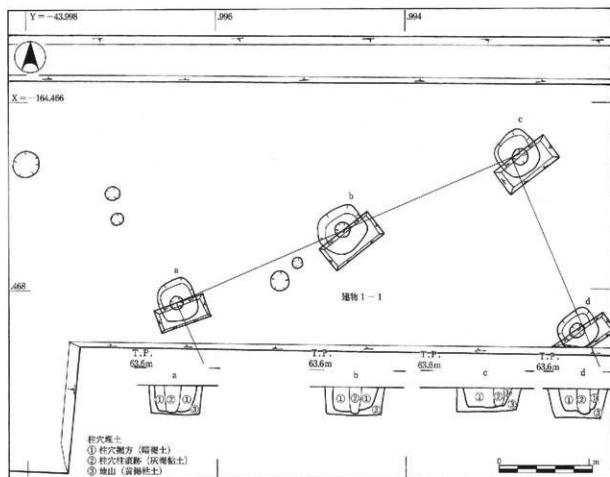


図8 建物1—1平面および断面図

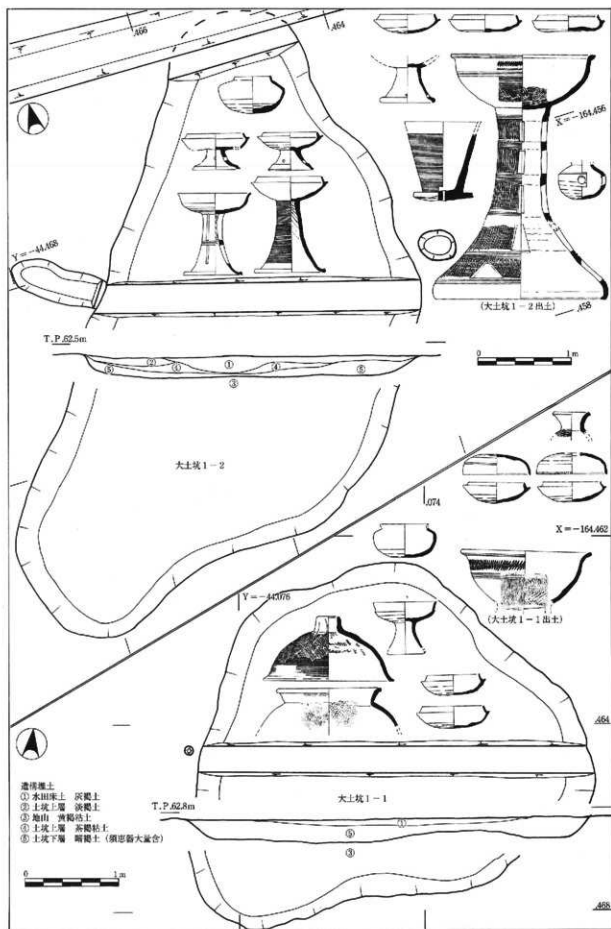


図10 1区の大土坑平面および断面図

1 b区は1 a区の西に位置する。1 c区に続く溝1-6や土坑などを確認された(図3)。

溝1-60は1 b区のほぼ中央に位置し、長さ4.2m以上、幅約4.2m、深さ約0.5mを測る大溝である。両端は調査区外へと続く。軸を西にむける。溝底には溝に沿って穴が確認され、溝の側面を整える杭が打たれたと考える。溝底は暗褐色粘土で、上面まで流水堆積が見られた(図5)。

溝1-62は溝1-60の西約3mに位置し、長さ2.7m以上、幅約0.3mを測る南北溝である。両端は調査区外へと続く(図5)。

土坑1-51は1 b区北東に位置し長軸0.7m以上、短軸約0.5mの不定形土坑である。暗褐色土で覆われ、六世紀後半の須恵器が含まれていた(図5)。

土坑1-50は土坑1-51の西に3.5mに位置する長軸約3m、短軸約2.2mの不定形な土坑である。南端は別の穴と連結するものの、埋め土は共通する。六世紀後半の須恵器がいくつかみられた(図5)。

土坑1-53は1 b区のほぼ中央に位置する長径約1.1m、短径約0.8mの楕円形土坑である。六世紀後半の須恵器が大量に発見された(図5)。

土坑1-54は1 b区のほぼ中央に位置する長径約1.2m、短径約0.8mの楕円形土坑である。六世紀後半の須恵器がいくつかみられた(図5)。

1 c区は東に1 b区、北西に1 e区、南西に1 d区と接する東西に長い調査区である(図3)。遺構上面の水田耕土や床土から六世紀後半の須恵器が数多く出土している。しかし、この地層からは中世の瓦器や瓦質土器、近世の陶磁器なども含まれており、現在の雑壇状の開発は近世前期頃と考える。遺構は南東から北西に長い地形に沿った溝群と不定形の土坑群である。いずれも六世紀後半の須恵器を大量に含む。

大土坑1-2は1 c区中央に位置する南北約6.6m、東西約3.6m、深さ0.2mの不定形土坑である(図10)。掘り底は平たく、地山ブロック土を含み、いっきに埋没した様相である。

大土坑1-1は1 c区南西に位置する南北約3.6m、東西約4m、深さ0.2mの不定形土坑である(図10)。掘り底は平たく、下層の暗褐色土からは須恵器が多く出土した。

溝1-6は1 b区から伸びる溝で大土坑1-2の手前で途切れる。長さ32.6m以上、幅約0.7~1.0mを測る。地形に沿って軸をやや北にむける。断面はU字形で、流水堆積は見られない(図6)。

溝1-7・溝1-8は溝1-6の南側に沿って発見された溝で、上面を削られ、掘り底が痕跡的に連続する。もともと、二条の溝が併行してあったようだ(図6)。

溝1-8は長さ約6.6m、幅約0.6m、三つに分かれる。溝1-7は長さ約1.4m、幅約0.3mである。いずれも暗褐色粘土で埋まる(図6)。

溝1-1は1 e区に延びる長さ25m以上、幅約0.3~1.2mの溝で、両端は調査区外へと続く。軸を北西にむける。断面はU字形で、流水堆積は見られない(図6)。

溝1-2は溝1-1と平行して延びる長さ約12.0m、幅約0.9mの南北溝である。軸を北西にむける。断面はU字形で、流水堆積は見られない(図6)。

溝1-3~5は溝1-1に直行する溝で軸は北東方向、南端は溝1-1にとりつく(図6)。

溝1-15は1c区南西隅で確認され、1d区に延びる長さ約12.2m、幅約0.4mの東西溝である。この溝の南側は一段高くなることから、土地を区画する溝と考える(図6)。

1d区は1c区の南西でL字に続く調査区である。掘立柱建物・溝・土坑が確認された。

掘立柱建物1-2は1d区南隅で確認された3×1間の東西棟である(図9)。主軸はやや真北からふれる。桁行は約1.6m、梁間は約1.8mを測る。柱穴は径0.2~0.4m程度の円形で、深さは約0.25~0.4mしか残されない。掘り方は暗褐色(砂利混じり)に覆われる。暗灰粘土の柱痕跡を残すものは2つのみで、抜き取り穴が明瞭なものが一つ確認された。この建物に伴うと考える同規模の柱穴がいくつかみられ、柱は度々補強されたい。

土坑1-2は建物1-2の南妻で確認された。長径約1.2m、短径約0.36m、深さ約0.18mを測り、六世紀後半の須恵器が含まれる(図7)。

土坑1-1は建物1-2内で確認された長軸約0.72m、短軸約0.6m、深さ約0.32mである。両土坑の西側は調査区外へと続く(図7)。

溝1-10は1d区の北東で発見された南北溝で、両端は調査区外へと続く。長さ4m以上、幅約0.9m、深さ0.1mを測る。掘り底は船底形である(図7)。

溝1-19は溝1-10に併行する長さ4.3m以上、幅約0.6mの南北溝である。両端は調査区外へと続く。溝1-11は北側が溝1-19に取り付き、南側が土坑1-8にとりつく長さ約5.2m、幅約1mの斜行溝である(図7)。

溝1-12は上面の長さ約5m、幅約1.8mで下層は土坑状の溝である。埋め土は上層が灰褐色粘土、下層が暗褐色粘土で須恵器壺・杯などが発見された(図7)。

溝1-16は溝1-12と土坑1-8を切る土坑状の溝で、長さ約2.5m、幅約1~2.7mを測る。西側は調査区外へと続く(図7)。溝1-16と土坑1-8の境界は明瞭にできなかった。

溝1-17は長さ1.8m以上、幅約0.9mの斜行溝で、上層は溝1-16にとりつく。東側は調査区外へとびる(図7)。

溝1-13は長さ約5.9m、幅約0.7~1.4mの斜行溝である。上層は灰褐色粘土、下層は暗褐色粘土で、須恵器を少量含む(図7)。

溝1-14は掘立柱建物1-2の北側で確認された長さ2m以上、幅約0.7mの東西溝である。軸を北西にむける。掘り底はU字形で、暗褐色土で覆われる(図7)。

1e区は1c区西端から南北に伸び西側にL字に折れる調査区である。1c区から続く溝1-1と溝1-2を確認した。しかし、二条の溝以外に遺構は検出されなかった。また、上面の遺物も閑散としており、この部分で遺構が途切れると予想できる(図6)。

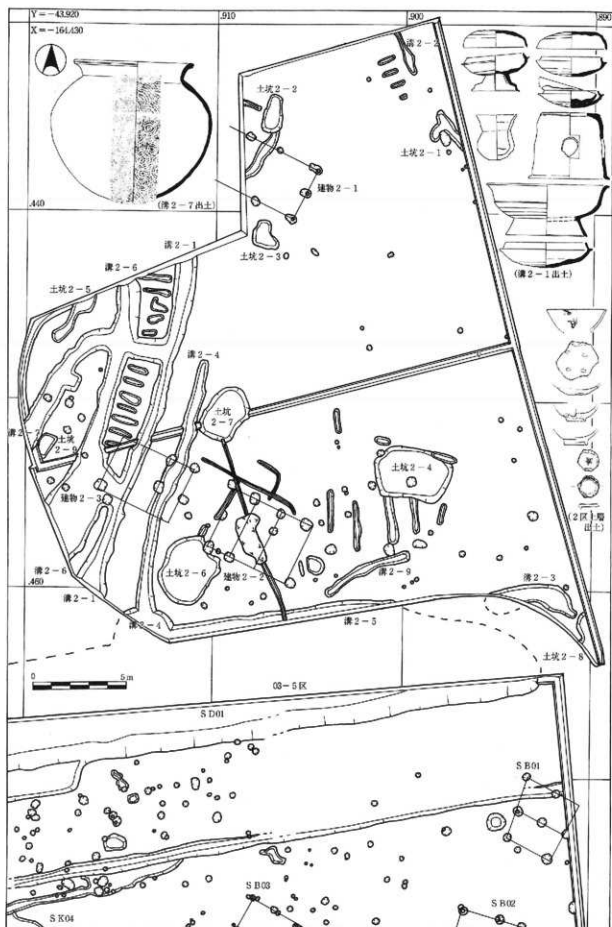


図11 2区遺構図

b. 2区の調査 (図版2)

2区は今回調査範囲の南東に位置する(図3)。調査区南側は03年度調査区の5区と隣接する。03年度調査区では中世の屋敷地方形区画が発見された。屋敷地を画する北側区画溝SD-01北岸を今回確認することができた。その他、掘立柱建物が三棟と溝・土坑などが確認された。出土遺物は六世紀後半代の須恵器が主で、少量の中世から近世初頭の土器が含まれる。以下に遺構詳細を示す。

掘立柱建物2-1は調査区北東で確認された2×2間以上の東西棟である(図12)。軸を北西にむける。桁行は約1.4m間隔、梁間は約2.2mを測る。柱穴は隅丸方形のものが一辺約0.4m程度、円形のものが径0.3~0.4mである。深さは約0.2~0.6mである。柱穴掘方は暗褐色土で、柱痕跡を明

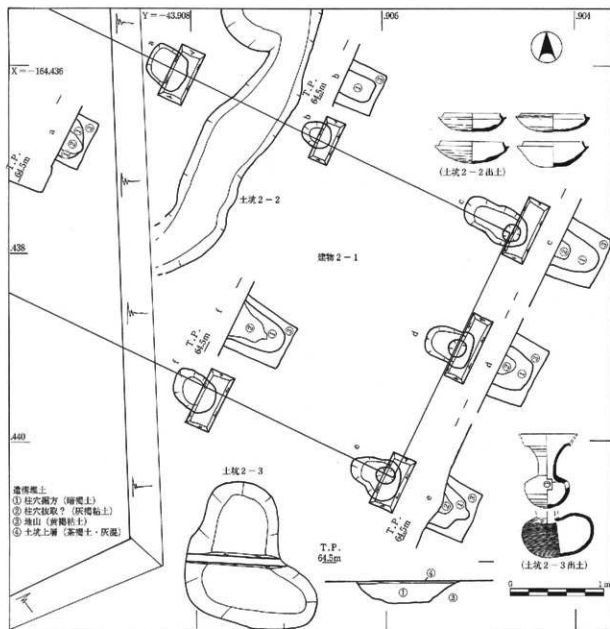


図12 建物2-1平面および断面図

隙に残すものはない。東側柱は灰褐粘土の柱抜き取りが確認された。

掘立柱建物 2-2 は調査区南端に位置し、溝 2-5 から北に約 1.4m 離れた場所で確認された 2×3 間の東西棟である (図 13)。主軸は地形に沿って北西にふる。桁行は約 1.7m 間隔、梁間は約 1.6m を測る。柱穴は一边約 0.3~0.5m 程度の隅丸方形で、深さが約 0.16~0.4m である。掘り方は暗褐色土で覆われており、灰褐粘土の柱抜き取り穴を残すものは八つ確認された。柱痕跡を明瞭に残すものはなかった。柱穴 b・柱穴 c の底面から河原石が出土した。根固め石と考える。一部の柱穴からは須恵器細片が確認できた。混入と考える。

掘立柱建物 2-3 は掘立柱建物 2-2 の北西約 2.4m に並んで建てられた 2×4 間の東西棟である。軸はほぼ共通し、北西にむける。桁行・梁間共に約 1.4m 間隔を測り、規模もほぼ共通する。溝 2-1・溝 2-6 に柱穴の一部が切られており、全容はよくわからない。

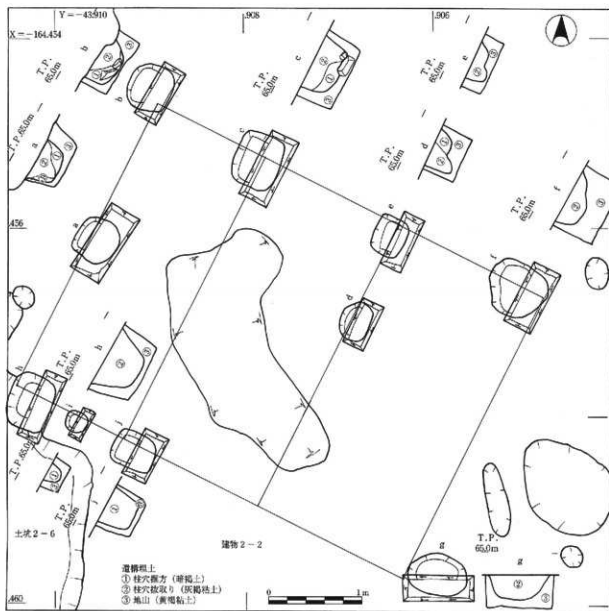


図 13 建物 2-2 平面および断面図

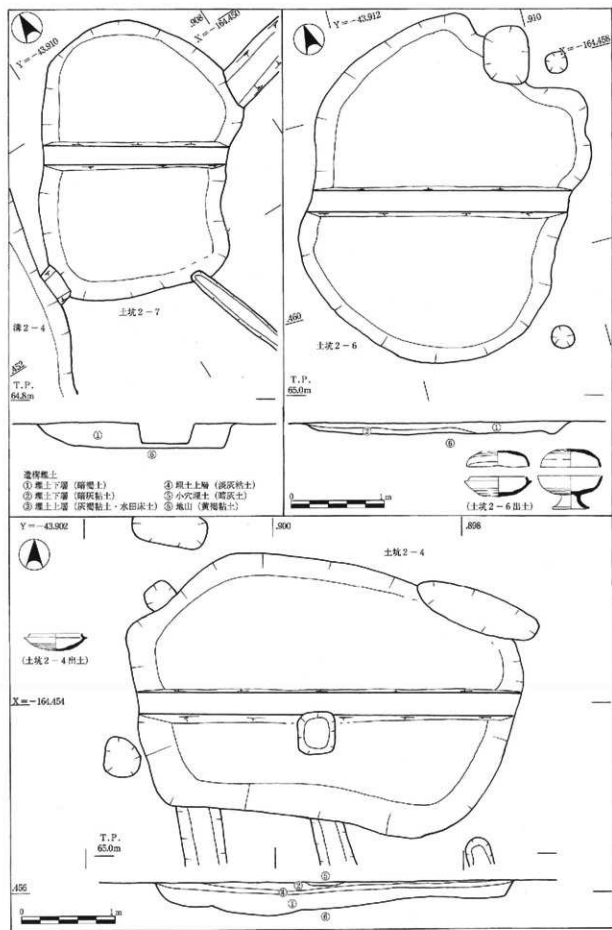


図14 2区の土坑平面および断面図

2区で発見された掘立柱建物は規模や主軸方向が共通することから同時期と考える。六世紀後半の須恵器工人集落にかかわる倉庫の一部だろう。調査区の東と北は削平が激しく、本来この部分にも遺構が広がっていた可能性がある。

は調査区西半に位置する長さ17.8m以上、幅約0.8~1.2mの南北溝である(図11)。軸をやや西東にむける。この溝に平行して、溝2-4・2-6が確認されている。いずれも溝の両端は調査区外へと続く。溝2-6は溝2-1から北西に約2.0m離れた場所で確認された長さ約14.4m、最長幅約2.8m、最短幅約1.0mの南北溝である。この溝と溝2-1とは二本の東西溝により繋がっており、また、調査区南西隅から延びる長さ7.6m以上、幅約1.0mの南北溝である溝2-7とは溝2-6に調査区の北西隅で合流する。溝2-4は調査区南西隅、溝2-1から東に約1.8m離れた場所で確認された、溝2-1に並行して延びる長さ14.2m以上、幅約0.6~2.7mの南北溝である。

溝に扶まれた空間はさらに直行する浅い鋤溝群が並ぶ。いずれの溝も流水堆積がなく、暗褐色土が覆う。これらの溝は耕作の畝溝と考える。溝の中からは六世紀後半の須恵器が大量に発見された。ただし、上面から少量の中世土器が見つかったこと、南側の03年度調査区から中世の屋敷地が発見されていることから、耕作痕跡はその頃まで降る可能性もある。溝2-4は屋敷地の北を区画する溝2-5に連結しており、その同時性を示唆する。

溝2-2は調査区北東隅に位置し、長さ2.5m以上、幅約0.3~0.6mの南北溝である(図11)。この溝は土坑2-1と接し、本来、一連の溝だったようだ。また、溝の西側には直行する鋤溝痕跡があり、耕作はこの地域にも及んでいたと考える。

溝2-3は調査区南東隅にある長さ4.7m以上、幅約1.0mの東西溝である。不定形な土坑状で、砂礫に覆われる。近世の陶磁器をいくつか含み、水路や井戸しゅんせつ時のゴミ溜めのような(図11)。

溝2-5は調査区南壁に沿って確認された長さ12.0m以上、最長幅約0.8m、最短幅約0.2mの東西溝である(図11)。この溝は03年度調査で確認された中世の溝であるSD-01の北側の対岸である。したがって、この屋敷地の北側区画溝は溝幅が約6.4mの大溝であることがわかった。ただし、溝は東端で途切れることが判明し、その東側は1m程ひな壇状に高くなるので、区画溝は屋敷地を囲みこむ機能はなく、むしろ排水や区画が目的だったようだ。

溝2-9は調査区南端、溝2-5の北側にある長さ約5m、幅約0.4mの東西溝である(図11)。

土坑2-1は調査区北東隅で確認された長さ0.8m、短径0.5mの不定形土坑である。

土坑2-2は建物2-1の北東側に約0.8m離れた場所で確認された長さ約2.1m、短径約1mの楕円形土坑である。二つの土坑は耕作に伴う溝の痕跡かもしれない(図11)。

土坑2-3は建物2-2の南側に約0.6m離れた場所で確認された、長軸約1.6m、短軸約1m、深さ約0.2mの不定形な土坑である。土坑上層には茶褐色土で炭が混じっており、土坑下層には柱穴掘り方と同様である暗褐色土で覆われている。掘り底は船底形である(図12)。

土坑2-4は調査区南東部にある長軸約4m、短軸約2.1m、深さ約0.4m楕円形土坑で、土坑上

層は暗灰土で覆われる一辺約0.4mの小穴があり、土坑周辺からも小穴が四つ発見された。掘り底は皿状で、暗褐色土に覆われ、六世紀後半の須恵器が多く出土した(図14)。

土坑2—5は調査区北西隅、溝2—6から約1.2m離れた場所で確認された長さ2.5m以上、幅約0.4~1.3mの不定形土坑で、六世紀後半の須恵器が大量に発見された(図11)。

土坑2—6は調査区南西隅に位置する長軸約3.8m、短軸約2m、深さ約0.1mの不定形土坑である。掘り底は浅く皿状である。上層の暗褐色土中より、須恵器が大量に発見された(図14)。

土坑2—7は調査区のほぼ中央、溝2—4のすぐ東側で確認された長軸約3m、短軸約1.9m、深さ約0.3mの方形土坑である。底面は平らで暗褐色土に覆われる(図14)。

以上の土坑は上層を後世にかなり削られており、本来の土坑の形はわからないが、もともと落ち込み状の地形に須恵器を投棄する目的で作られたゴミ穴と考える。その投棄が六世紀後半か、中世以降かは判然としない。

土坑2—8は調査区南東隅で確認された幅約0.8mの浅い溝状土坑である。この土坑には近世の陶磁器や瓦がいくつか認められ、溝2—3と共通する性格と考える(図11)。

c. 8区の調査(図版3)

8区は1区の西、今回調査範囲の南西に位置する。水路構築に先立つ調査でL字形の細長い調査区である(図15)。8区では掘立柱建物一棟と溝・土坑などが確認された。遺構は西側に偏り、東側は削平が強かった。以下に、遺構詳細を示す。

掘立柱建物8—1は調査区南端で確認された2×1間以上の総柱建物である(図16)。建物の西側は調査区外へと続く。軸をやや西に傾け、桁行は2.1m間隔、梁間は1.7mを測る。柱穴は隅丸方形のものが一辺0.4~0.6m程度、円形のものが径0.4~0.5mである。深さは約0.3~0.5mである。掘り方は暗褐色土である。灰白粘土の柱痕跡を残す柱穴が一つ確認された。灰褐色粘土の柱抜き取りは五つが確認された。壁際の柱穴bから須恵器高杯が据えられて発見された。東面隅柱の外側に補助の柱穴と思われる小穴を確認した。隅柱の外側、約0.5mに確認された。

溝8—1は8区北隅で確認された長さ1.5m以上、幅約0.3mの東西溝である。西側は調査区外へと続く。軸をやや北にむける(図15)。

溝8—2は溝8—1から南に約5.5m離れて確認された長さ8.0m以上、幅約0.7mの斜行溝である。軸を北西にむける。溝の中央付近で土坑を切る(図15)。

溝8—3は溝8—2から南に約0.5m離れ、溝8—2に直行するように確認された長さ3m以上、幅約9m、深さ約1mで南北に一段のテラスを設ける斜行溝である。主軸をやや北側にむける。南北のテラス上の幅は北側が約1.5m、南側は約5mと南側が広い。南側のテラスには小穴が一つと土坑8—1が確認されている。下層の溝は長さ3m以上、幅約2.3mで、六世紀後半の須恵器と流水堆積が認められた(図15)。

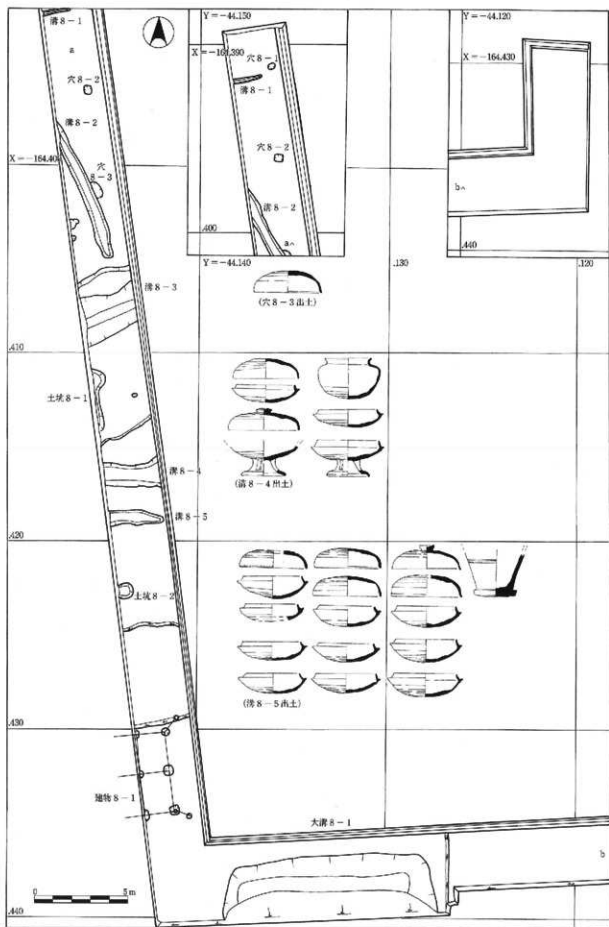


图15 8区遺構図

溝8-4は溝8-3の南に約2m離れた位置で溝8-3に併行する形で確認された長さ3m以上、幅約1.3mの東西溝である(図15)。

溝8-5は溝8-4の南約1m離れて確認された長さ2.8m以上、幅約0.9mの東西溝である(図15)。

土坑8-1は溝8-3の南側テラスで確認された長軸約3.3m、最長幅約0.6m、最短幅約0.3mの不定形土坑である。西側は調査区外へと続く(図15)。

土坑8-2は掘立柱建物8-1の北側、約6m離れて確認された直径が約0.9mの円形土坑である。西側は調査区外へと続く(図15)。

大溝8-1は8区南端で確認された長さ6.4m、幅3.6m以上、深さ約1.2m以上の溝状遺構である(図15)。大溝の底は暗灰粘土で覆われており、水が滲水していたことがわかる。溝の下層からは幕末～大正時代頃の陶磁器が発見され、上層からはレンガ・木屑・ガラス瓶など、戦前までのゴミが堆積していた。この溝の南側は宅地となっており、溝について尋ねたところ、戦前までの

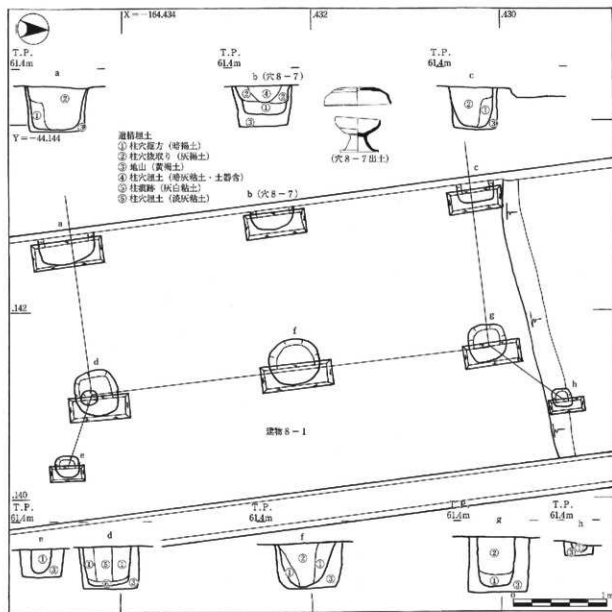


図16 建物8-1平面および断面図

屋敷に伴う壁土を採掘したあとと聞いた。確証は得られないが、この地域の屋敷地の四周には一段低くなった空地があり、その内側に土塀がある。空地は土塀の土を取ったあとで、屋敷の排水の機能もあるという。

大溝8-1は屋敷の立て替えに際し、廃材などが捨てられたようだ。そして、現在は土塀がなくなり、ブロック塀へ替わったため、掘削もなくなり、ゴミの回収が制度化したため、ゴミ穴の必要もなくなったという。

この事例が近世末から近代のみに対応する現象か、これまで発見されている中世の屋敷地の区画溝にも当てはまるのか判然としないが、屋敷地の区画溝の機能を考える上で重要な示唆を与えてくれる。

溝8-3・8-4・8-5は南から北に緩やかにくだる地形に併行して東西に刻まれており、流水堆積が認められることから、1c区の溝に連続する水路の性格がうかがえる。溝の中には六世紀後半の須恵器が廃棄されていたが、これらの廃棄は同時期のものかわからない。1・2区同様、古墳時代集落廃絶後の耕地化に伴って捨てられたものかもしれない。

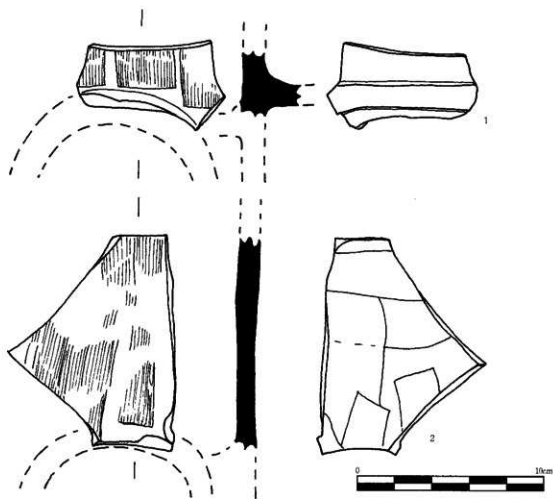


図17 1区出土陶棺

d. 3・4区の調査(図版2)

3・4区は今回調査区の北西に位置する(図3)。3区は南北に細長く約38m、幅約4mのトレンチである(図18)。溝二条、土坑・小穴をそれぞれ一つずつ確認した。4区は3区の南東、約50mに設定された細長い調査区である(図18)。4区からは溝一条、土坑四などを確認した。以下に、遺構詳細を示す。

溝3-1は調査区北部で確認された長さ7m以上、幅1.5m以上の南北溝である(図18)。軸をやや東にむける。溝の西側は調査区外へと続く。溝の上面には砂利混じりの整地層があり、そこから江戸時代後期の磁器碗や灯明台などが発見された。この溝の西、調査区外には嘉永年間に建てられた地蔵がある。ただし、道路拡張により現在の場所へ動かされたようで、今回発見された整地層は地蔵堂に伴うものかもしれない。

また、この付近に土壇状の高まりが航空写真などで確認されており、陶器千塚の一つと考えられていた。今回発見された溝について、当初は古墳周溝の可能性を考えたが、古墳時代の遺物がまったく見つからなかったこと、調査区の西側部分を堺市教育委員会が道路の下水管理設に伴って試掘調査したところ、墳丘状の高まりは認められず、水田耕土と床土が見つかったことから、溝の西側に古墳がある可能性はないと結論付けた。

溝3-2は溝3-1に沿って南側に発見された長さ10m以上、幅約1.2mの南北溝である(図18)。軸を北東にむける。溝3-1と溝3-2のそれぞれの主軸方向から考えると、溝3-1と溝3-2は調査区外の南西で合流するようだ。

土坑3-1は溝3-1と溝3-2の間で確認された長径約2.5m、短径約1.8mの楕円形の土坑である。溝3-1上面の整地層と共通する砂利層が確認された。整地に伴うものか(図18)。

穴3-1は溝3-1の溝底から確認され、直径0.3m、深さ0.1mを測る(図18)。

溝4-1は4区南半で確認された長さ3m以上、幅約0.7mの東西溝である(図18)。

土坑4-1は調査区の北東隅で確認された長軸0.6m以上、短軸約0.5mの不定形土坑である。土坑の東側は調査区外に続く(図18)。

土坑4-2は土坑4-1から南西に約4.5m離れて確認された長軸0.8m以上、短軸0.68mの不定形土坑である。土坑埋土は暗褐色で覆われており、底は船底形である(図18)。

土坑4-3は土坑4-2から東に約1m離れて確認された長径約0.6m、短径約0.5mの楕円形土坑である(図18)。土坑埋土は暗褐色で覆われており、底は皿状である。

土坑4-4は土坑4-3から南に約5m離れて確認された一辺約0.5~0.6mの方形土坑である。土坑埋土は上層が黒灰粘土の炭混じりで下層は暗褐色、掘底は皿状である(図18)。

4区からは遺物がほとんどみつからず、遺構の時期や性格はわからない。4区西側の試掘調査では江戸時代初頭の遺物を大量に含む土坑などが発見され、層敷の発見が予想されていた。

e. 5・6区の調査 (図版2)

5区は今回調査区の北東に位置する南北58mの細長い調査区である(図3)。さらに5区から東に約20mの所に6区が位置する。5区からは溝が三条、土坑が三つ確認された(図19)。6区からは中世から近世初頭の土器・瓦を含む区画溝とその内側から柱穴群が確認された(図19)。以下に、遺構詳細を示す。

溝5-1は調査区北半に位置する長さ5m以上、幅約1mの東西溝である。軸をやや南にむけ、両端は調査区外へと続く(図19)。

溝5-2は調査区のほぼ中央付近で確認された長さ2.2m以上、幅約0.4mの南北溝である。軸をやや東にむける(図19)。

溝5-4は調査区南半で確認された長さ4.4m以上、幅約0.8mの東西溝である。軸を南東にむけ、西側は現水路に取り付き、東端は調査区外へとびる(図19)。埋め土は砂利混じりの暗褐色土で須恵器の碎片が大量に含まれていた。中・近世の暗きよと考える。

土坑5-2は調査区北端で確認された直径2m程度の土坑である。暗褐色土で覆われ、掘り底はすり鉢状で、調査区外へおよぶため全容は確認できなかった。江戸時代後期の磁器が発見されており、近世の素掘り井戸と考える(図19)。

土坑5-3は調査区南半に位置し、溝5-4から西に1.6mで確認された長軸3.6m以上、短軸1.2m以上、深さ約0.2mの方形土坑である。暗褐色土で覆われ、西と南側は調査区外へと続き、形状や性格は不明である(図19)。

土坑5-4は調査区北半に位置し、溝5-1から北に1.6m離れた所で確認された直径約1.2mの土坑である。暗褐色土で覆われ、出土遺物はない(図19)。

溝6-1は6区の南で発見された幅広く浅いL字形の大溝である(図20)。その東南は一段高くなり、柱穴群がある。したがって、この溝は屋敷地の区画溝で、調査区が屋敷地の北西隅を検出したととらえる。溝は地形的に低くなる北西部が開き、溝6-4に連結して排水の機能をもつ。溝6-1の南北部分は東西の幅は約5m、最も幅が狭い部分で約2mである。

溝6-2は溝6-1の南、溝6-1に沿って確認されたL字状の溝である(図20)。削平によって東西溝の一部は確認されなかったが、本来東端で確認された東西溝に接続すると考える。欠損部分を復元して測れば、東西約5m、南北約3.4m、溝の幅は約0.2m~0.4m、深さ0.1mである。建物に伴う雨落ち溝の可能性がある。

溝6-3は溝6-1の下層で確認されたコ字形の溝である(図20)。調査区南端から北にくぐり、コ字形に折れ曲がり、溝6-6に接続する。南北長9.6m以上、折れ曲がって南北に約3.4m、東西に約2.1mを測る。最長幅約3m、最短幅約0.4mで、暗褐色粘土に覆われていた。溝6-1のたまり水を排水する性格と考える。

溝6-4は溝6-1の外側を取り巻くL字形の溝で、東西長6.8m以上、南北長約13.6m以上、

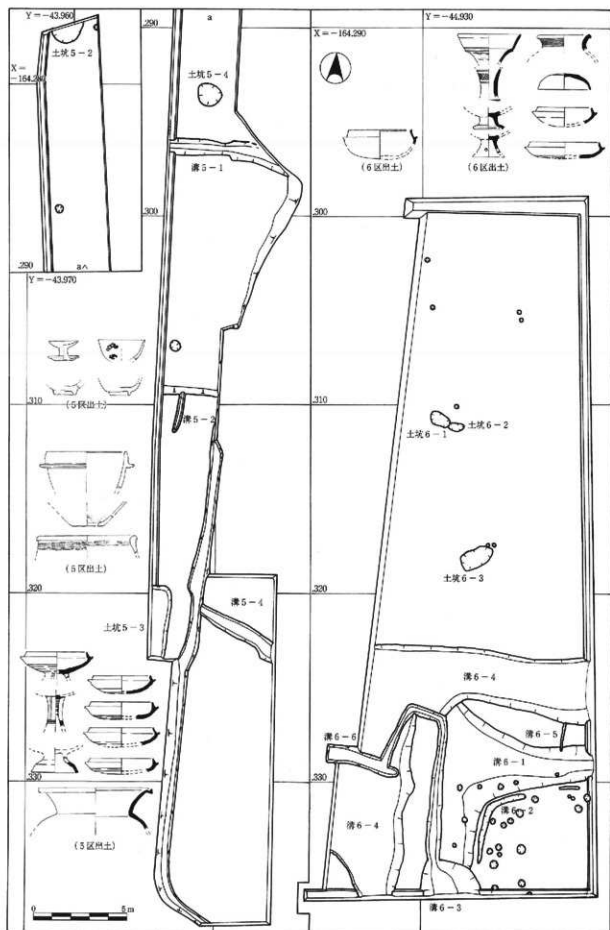


图19 5·6区遺構図

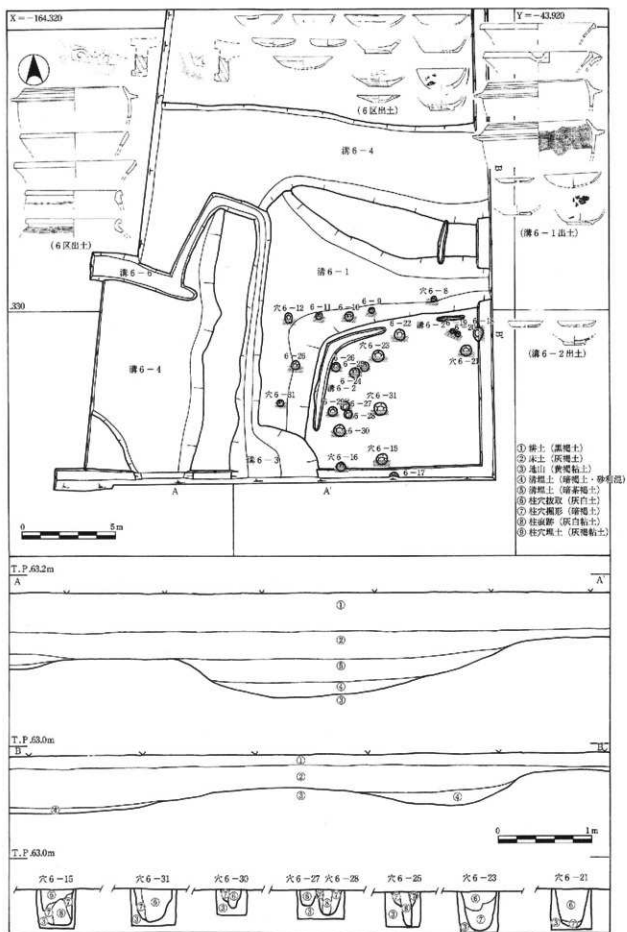


図20 6区方形区画平面および断面図

東西幅約2.8m、南北幅4mを測る(図20)。

溝6-5は溝6-1と溝6-4の間に位置する長さ約1.6m、幅約0.2mの南北溝である(図20)。

溝6-6は調査区の南西に位置する長さ3.8m以上、幅約0.8mの東西溝で、西側は調査区外へと続く(図20)。溝6-4のたまり水を西に排水すると考える。

溝に区画された土段内と溝6-1の肩には多数の柱穴が見られる。しかし、建物のまともりはとらえられなかった。柱穴は灰白粘土の柱痕跡や灰褐色の柱抜き取り痕など、柱穴であることが判断できるものがいくつかあるものの、暗褐色で覆われる浅いものもある。溝の肩から発見されたものも等間隔に一列になく、杭列とは考えにくい。

穴6-15は調査区南端で確認された径0.36m、深さ0.4mの柱穴で、灰白粘土の柱痕跡を残す(図20)。

穴6-31は穴6-15から北に約1.4m離れた所で確認された径0.44m、深さ0.36mの柱穴である。灰白土の柱抜き取り痕跡を明瞭に残す(図20)。

穴6-21は調査区南東隅で確認された径0.36m、深さ0.4mの柱穴である。灰白土の抜き取り痕跡を明瞭に残す(図20)。

穴6-23は穴6-15から北に約3.4m離れた所で確認された径0.36m、深さ0.4mの柱穴である。灰白土の柱抜き取り痕跡を明瞭に残す(図20)。

穴6-25は穴6-23から南西に0.4m離れた所で確認された径0.3m、深さ0.36mの柱穴である。灰白粘土の柱痕跡を残す(図20)。

穴6-27は穴6-31から西に約0.8m離れた所で確認された径0.16m、深さ0.2mの柱穴である。灰白土の柱抜き取り痕跡を残す(図20)。

穴6-28は穴6-31の南東側に接して確認された直径0.3m、深さ0.3mの柱穴である。灰白粘土の柱痕跡を残す(図20)。

穴6-30は穴6-28から南に約0.4m離れた所で確認された径0.24m、深さ0.2mの柱穴である。暗褐色の掘り方痕跡を残す(図20)。

土坑6-1は調査区中央に位置し、土坑6-2と接する長径約1.2m、短径約0.6m、深さ0.1mの楕円形の上坑である(図19)。灰白粘土で覆われ、遺物は発見されていない。

土坑6-2は長径約0.8m、短径約0.3m、深さ0.2mの楕円形土坑である(図19)。灰白粘土で覆われ、遺物の発見はない。

土坑6-3は調査区中央で確認された長径約1.8m、短径約1m、深さ0.1mの楕円形の土坑である(図19)。灰白粘土で覆われ、遺物の発見はない。以上の土坑は埋め土が共通するが性格は不明である。

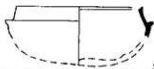


図21 6区出土古墳時代中期須恵器杯身(1/4)

f. 7区の調査 (図版3)

7区は3区の東、5・6区の北に位置する(図3)。調査区の大部分は後世に削平を受けているため、遺構は少ない。調査区の北側と西側は一段低くなっており、南側と東側を削った土をもって、水田区画を拡張した痕跡と考える。調査区中央にさらに小区画水田の痕跡があり、高いところを削って整地したようだ。以上の整地土である水田床土には六世紀後半の須恵器片が粉碎された形で多数含んでおり、意図的に砕かれたようだ。溝の痕跡を二条、土坑を二つ確認した。以下に、遺構詳細を示す。

溝7-1は調査区北半で確認された長さ17.4m以上、最長幅4.2m、最短幅2.0mの東西溝である(図23)。主軸をやや北にむける。調査区中央付近で溝7-2に切られる。溝埋土は暗褐色粘土で、溝底は皿状である。溝の両端は本来、調査区外に続いていたと考えるが、両端部は削られる。六世紀後半の須恵器を大量に含むが、小片に破碎されており、後世の耕作で壊されたと考える。流水による堆積は認められなかった。

溝7-2は調査区中央を南北に縦断する長さ21m以上、幅約0.1mの南北溝である(図23)。耕土と共通する黒褐土に覆われ、近・現代の耕作に伴う暗きよと考える。上面に瓦がいくつか見られた。南端は調査区外へと続く。

土坑7-1は調査区東半に位置する長軸約1.4m、短軸約1mの不定形土坑である(図23)。土坑埋土は暗褐色土で掘り底は皿状である。遺物は含まれない。

土坑7-2は調査区東隅に位置し、土坑7-1から東に約1.5m離れた所で確認された長径約0.5m、短径約0.4mの楕円形土坑である(図23)。土坑埋土は灰褐色土で覆われ、底は皿状をなす。遺物はなく、両土坑の時期や性格はわからない。

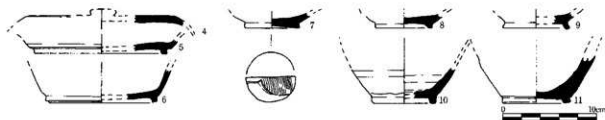


図22 古代の須恵器

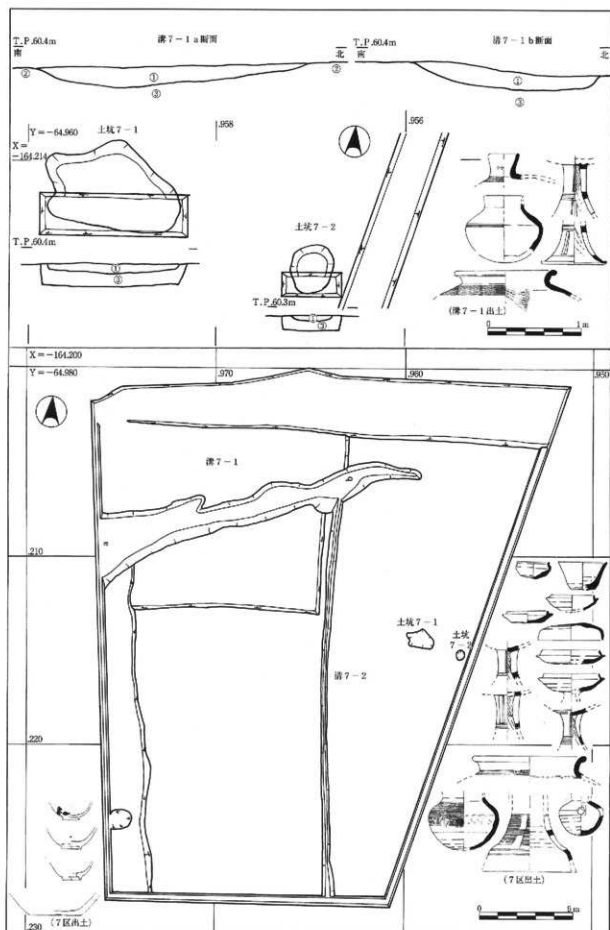


图23 7区遺構図

2. 出土遺物

今回調査ではコンテナ約200箱の遺物が出土した。内訳は六世紀後半の須恵器が大半で、その他、旧石器時代と縄紋・弥生時代中期にかけてのサヌカイト石器、五世紀後半の須恵器、奈良時代の須恵器、平安時代の須恵器、中世の瓦器・土師器・陶器・瓦、近世・近代の陶磁器類などである。その他、時期不明の鉄器、柱根がある。

これまでの調査でも、五世紀～六世紀前半の須恵器は少なく、多くの窯が発見されている実態に対応しない。また、飛鳥時代の遺構も陶器南遺跡の南端に限られ、窯とは遠い。奈良時代後期から平安時代の窯もいくつか見つかっているが、まとまった遺物は発見されていない。以下に時期ごとに概要を示す。

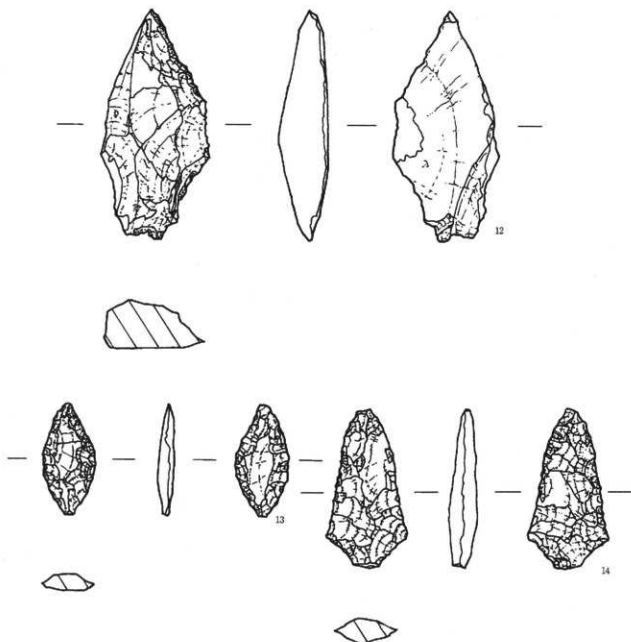


図24 サヌカイト製打製石器 (1/1)

a. 古墳時代後期以前の遺物 (1～8区)

六世紀以前の遺物には、サヌカイト製の打製石器がある。いずれも後世の遺物包含層から発見され、遺構に伴うものではない(図24 図版7)。

ナイフ形石器(12)は最大長6.2cm、最大幅2.8cmを測る。以前に陶器南遺跡の調査で一点採集されており、二例目の発見である。打製石鏃は凸基式のものが二点発見された。縄紋時代のものか弥生時代のものか明快でない。小は最大長3.1cm、最大幅1.6cm、厚さ0.4cmを測る(13)。大(14)は最大長4.4cm、最大幅2.1cm、厚さ0.6cmを測る。その他、サヌカイト剥片がいくつかみつまっている。

縄紋土器、弥生土器、古墳時代前・中期の遺物は発見されていない。古墳時代中期の遺物として、6区から五世紀後半の須恵器杯身片が発見されている(図21)。この時期の窯が1区の南斜面で発見されている。

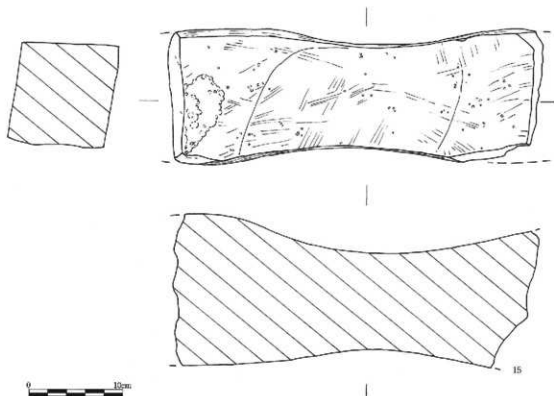


図25 1区出土礎石

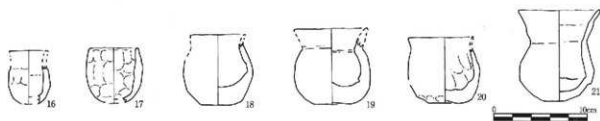


図26 1・2区出土土師器小壺

b. 古墳時代後期の遺物（1区）

1区出土遺物は六世紀後半の須恵器が大半で、その他に同時期の土師器の小壺（16）～（21）と甕・カマド小片、凝灰岩製の砥石（15）がある。須恵器は杯・高杯・鉢・壺・器台・コシキ・甕などがある。特殊なものとして、須恵器製作か焼成の道具と思われる乾燥台と陶棺二片、タコ壺がある（図28～41 図版4～6）。

砥石は最大長19.1cm、最大幅7.6cmの方柱形で長辺の四面を刷り面に使う。鉄製品の荒研用で、農耕具の調整に使ったものだろうか。溝1～53最下層から発見され、この溝からは須恵器が大量に出土しており、同時期の可能性が高い（図25 図版7）。

土師器小壺はいずれも手づくねで、ロクロを使用しない（図26）。高さ6～10cm、口径4.4～8.1cmである。頸部を明確に作り出すものと曖昧なものがあり、底部は2cm以上の厚みのものがある（18）・（19）。

土師器甕は外面をハケメ仕上げし、鏝がめぐるもの、めぐらないものがある。いずれも小片で摩滅が激しい。これに伴うカマドも小片で出土した。

須恵器杯蓋（33）～（48）・（88）～（107）・（128）～（135）は、口径10.1～16.4cm、高さ3.2～4.4cmである（図28～30）。焼きが甘く乳白色のものや、ひずみが強く正円にならないものが目立つ。口縁端部は丸く仕上げるもの、段にするもの、やや尖らせるものなどの多様性がある。外面は屈曲が明快で沈線を施すもの、なだらかに丸く仕上げるものがある。天上部はどれも丁寧に回転へら削りを施す。口縁端部外面に乾燥時にムシロの跡がつくものはいくつかある。

杯身（49）～（87）・（108）～（127）・（136）～（151）は、口径10.1～16.4cm、高さ3.2～4.4cmである（図28～30）。これらも焼きが甘く乳白色のものや、ひずみが強く正円にならないものが目立つ。口縁部は内傾するものが大半で、湾曲して端部のみ直立するもの、短く直立気味のものもある。口縁端部は、丸く仕上げるもの、段にするもの、やや尖らせるものなどの多様性がある。外面はな

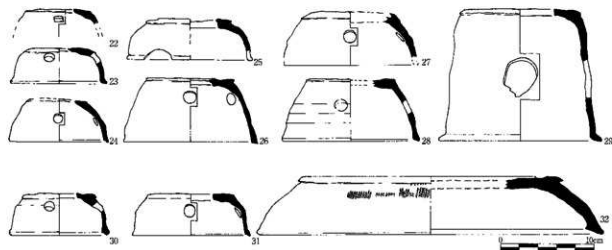


図27 1・2区出土須恵器乾燥台

だらかに丸く仕上げ、天上部は丁寧に回転ヘラ削りを施すが、ヘラ削りのないものもある(54)。

高杯は長脚二段透かしのものと低脚で一段透かし、あるいは透かし穴をもたないものがある(157)～(192)。長脚の高杯は有蓋と無蓋がある。有蓋高杯は、二段の透かし穴があり、ほぼ同じ長さのものと下の段が上の段の半分程度のものがある。その蓋は頂部につまみのつくものと無いものがあり、外面にカキ目調整を施すものもないものがある。無蓋高杯は杯部がラッパ状に開き、刺突文や屈曲部にいくつかの段を施すものと杯蓋を転用しただけのものがある。皿状の杯部に耳があるものは(163)、類例が兵庫県八幡山六号墳出土土師器に知られる。

低脚の高杯にも有蓋と無蓋があり、両者とも蓋杯を転用したつくりである(171)～(192)。透かし穴は長方形で三方向か四方向、穴を開けずカキ目調整で仕上げるものなどがある。脚端部は平たく仕上げるものと尖らせて接地させるものがある(図28～30)。

こね鉢は(193)・(194)・(196)～(202)、口縁部を平たく仕上げ、底部を円盤形に仕上げ、中心に穿孔が有るものと無いものがある。体部外面はカキ目調整するものとナデ仕上げのみのもの、環状の把手を付けるものがある(図32)。

鉢は口縁端部を丸く丁寧に仕上げ、口径17.6cm高さ7.9cmを測る(198)(図32)。台付の鉢は口縁端部が直立するもの(232)と内傾するものがある(234)(図34)。

イイダコ壺は小壺の側面と底に穿孔、口径4.6cm高さ4.9cmを測る(195)(図32)。

ハソウは頸部に段を設け、ラッパ状に開く。体部は小さくほぼ球形にし、底部を丸く削りだすものと平たくするものがある(203)～(217)。頸部外面をカキ目仕上げするもの、波状紋や刺突紋の加飾を伴うものがある。ハソウのうち、体部に穿孔の無いものも見られる(215)(図33)。

壺は長頸と短頸、台付のものもある。長頸壺はラッパ状の頸部に波状紋の加飾を施すもの(218)、直立気味のものがある。後者には蓋が伴うと考える(229)・(230)。短頸壺は扁平の体部で底部を丸く仕上げる小型品である(225)～(228)。体部にカキ目調整するものがある(225)。

短頸壺の蓋は扁平な皿状で口径13～20cm、高さ2～3cmとなる(221)～(224)(図33・34)。

短頸壺の蓋と形状が似るものとして漏斗状製品がある(219)。器台杯部と整形は共通し、頂部が筒状となる。口縁端部は平たく接地し、丁寧になでられる。外面は格子目タタキ、内面は同心円タタキの痕跡が明瞭で、内面は粗くナデ消す。用途不明で、六世紀後半～八世紀の遺跡に出土例が知られる(図33)。

器台は長い脚に口径30cm程度のカップ状にひろく杯部をもつ大型品である(235)・(236)・(238)～(244)。杯部が小型のものや壺などを付ける器台はない。杯部は屈曲部外面に段や沈線をつくり、波状紋や刺突紋の加飾をもつものと屈曲部が明瞭でなく、加飾しないものがある。杯部外面と内面にはタタキの痕跡が残る。口縁端部は厚く平らにするものと直立気味に尖らせるものがある。長脚の脚部外面は緻密な波状紋が見られ、三方向・四方向の方形透かしをあげる。脚端部は平らに仕上げ、直立気味に折り曲げる(図34・35)。

器台の仲間として、発達した高台をもち、口縁端部を屈曲させる金属器模倣の鉢がある(237)。

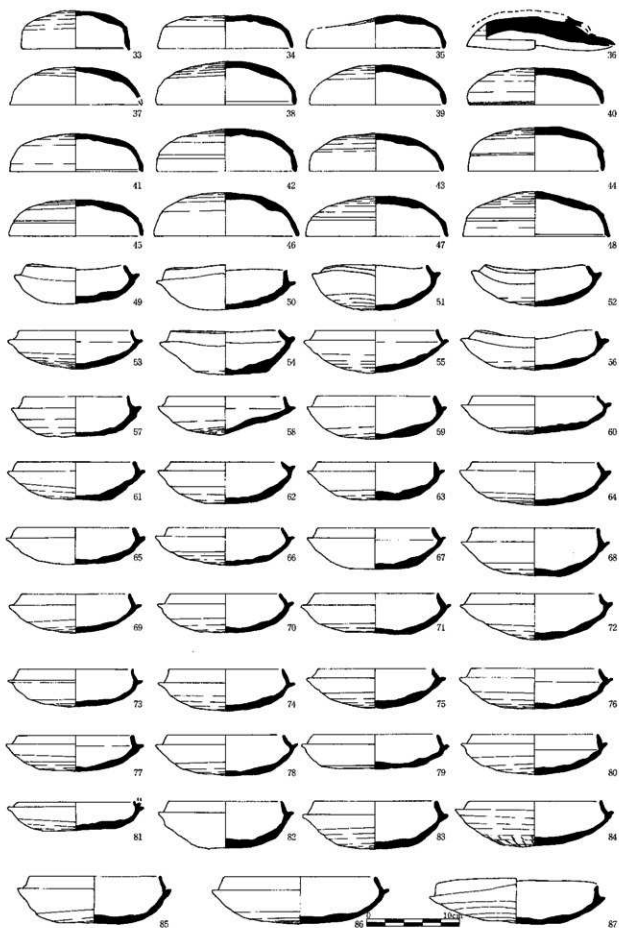


图28 1区出土须惠器(1)

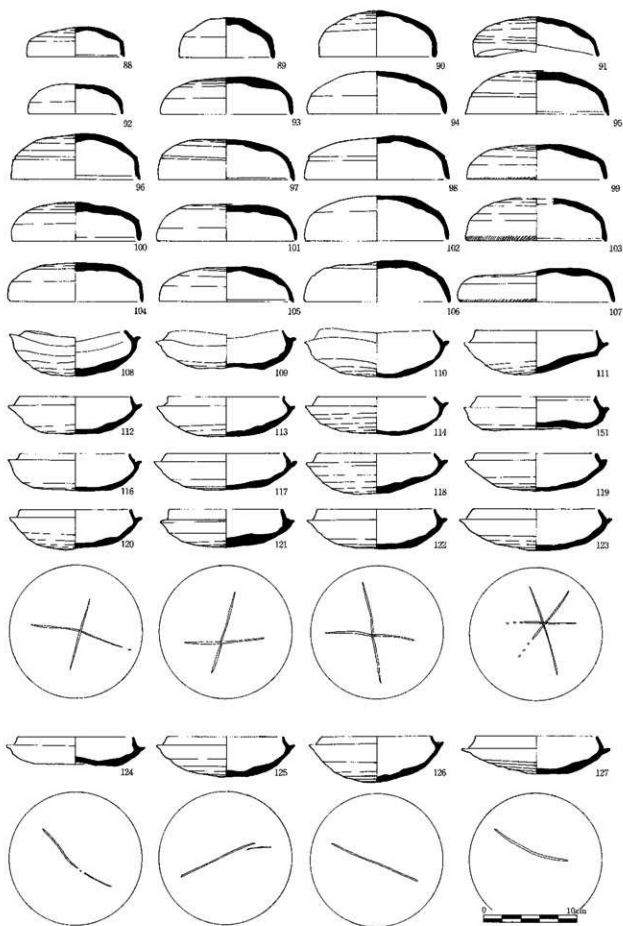


图29 1区出土须惠器(2)

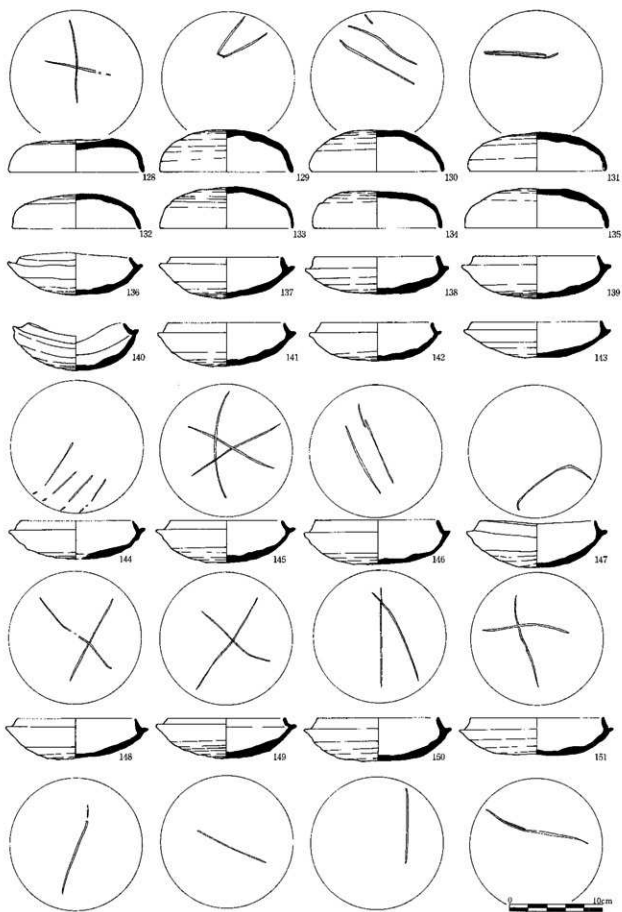


图30 1区出土须惠器(3)

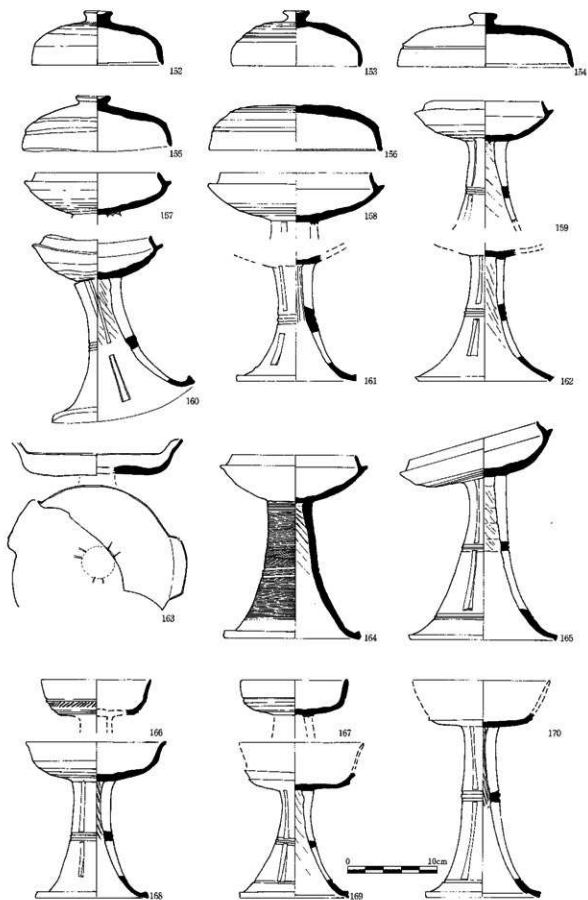


图31 1区出土须惠器(4)

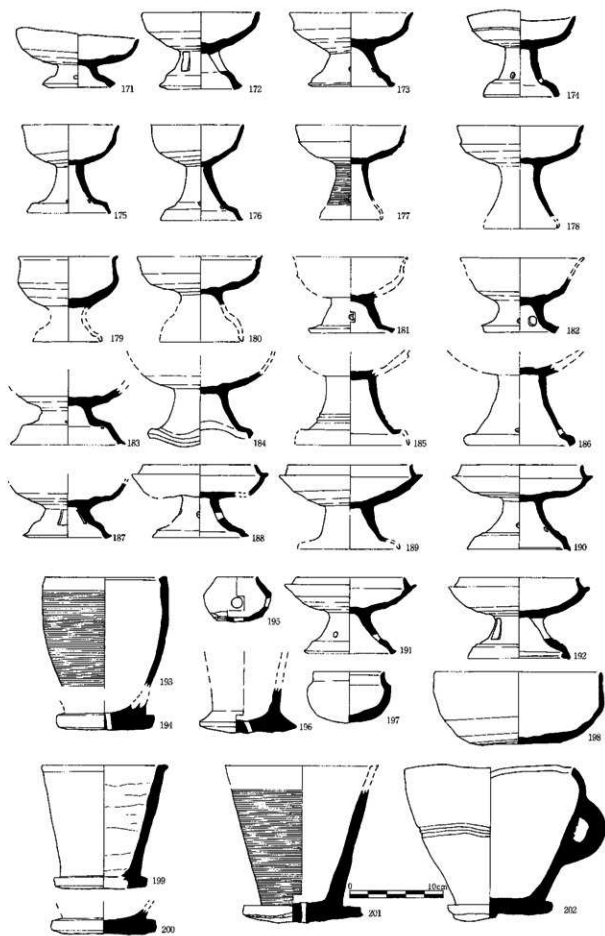


图32 1区出土须惠器(5)

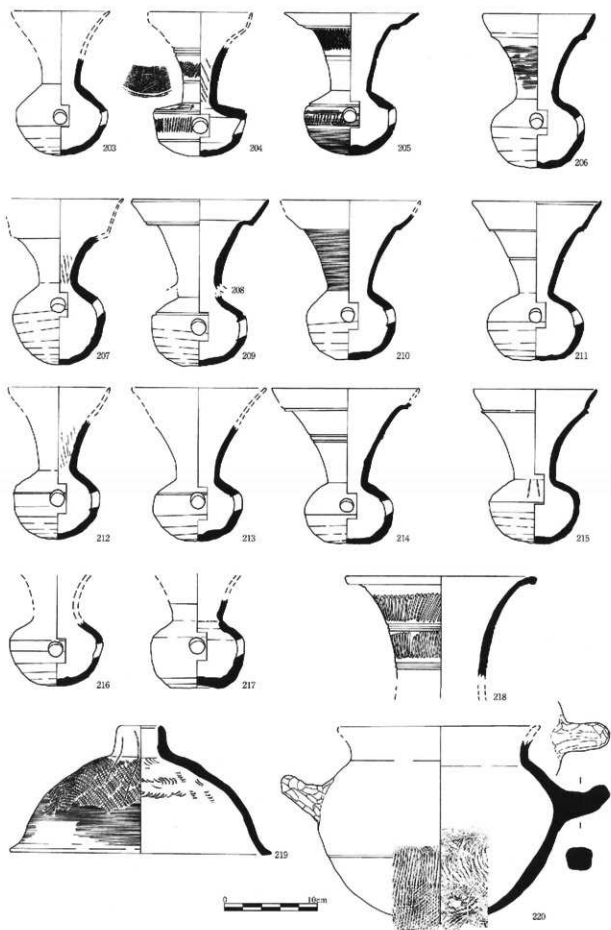


图33 1区出土须惠器(6)

杯部は加飾がなく、丁寧にナデ仕上げし屈曲部に沈線を施す。器厚は1cm前後で分厚い(図35)。

提瓶は口縁部を折り返し、丸く分厚く仕上げるものと、直立気味に尖らせるものがある(245)～(249)。体部はカキ目仕上げし、肩に環状の把手を付けるもの、鈎形の把手を付けるものがある(図36)。

横瓶は砲弾形で、口縁部径16.4cm、体部最大長26cmの大型から、口縁部径7.1cm、体部最大長10.4cmの小型がある(250)～(255)(図36・37)。

甕は頸部が小さく、体部は柿の実形か球形で、口縁端部を折り返して下方向に屈曲するもの、丸く仕上げるものなどがある(259)～(272)。大半は体部外面に格子目タタキを、内面に青海波紋

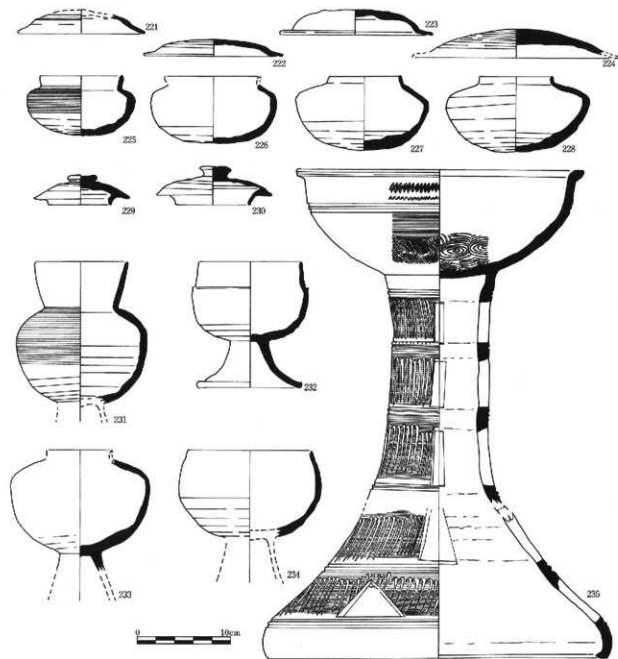


図34 1区出土須恵器(7)

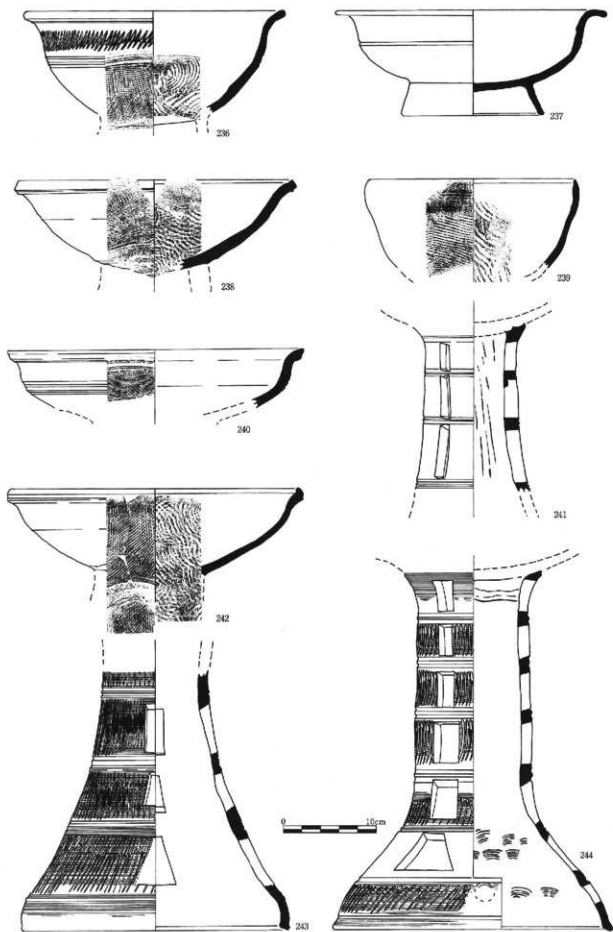


图35 1区出土须惠器(8)

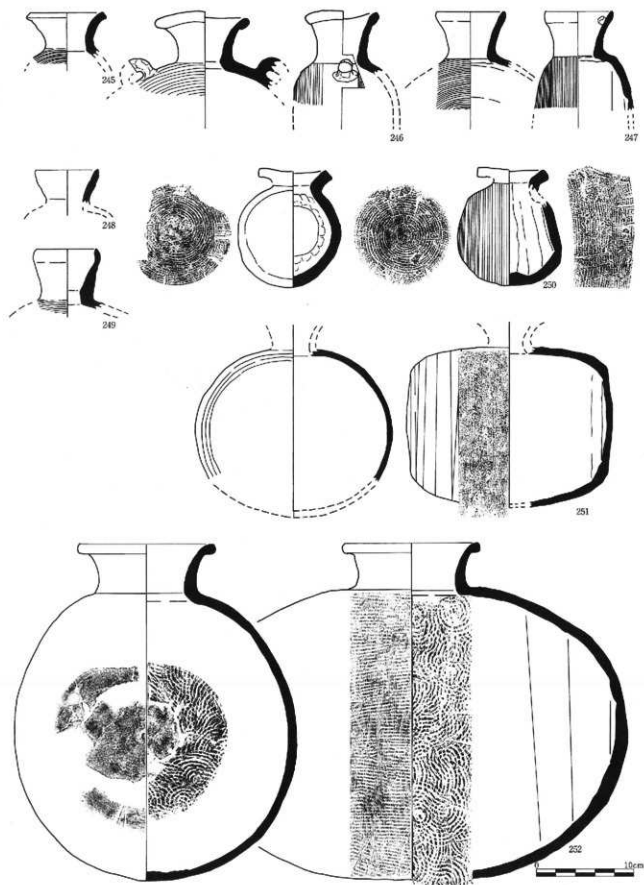


图36 1区出土须惠器(9)

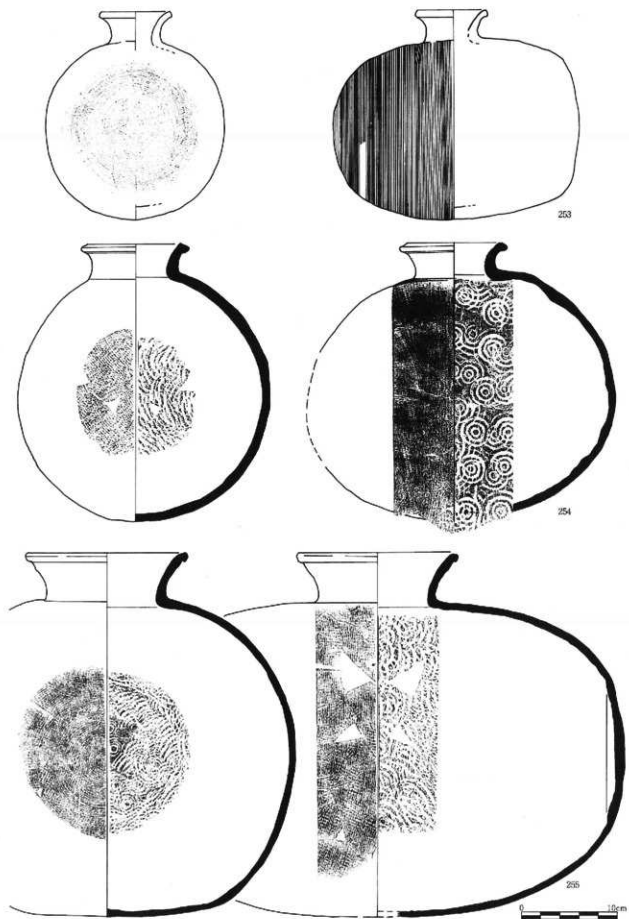


图37 1区出土须惠器 (10)

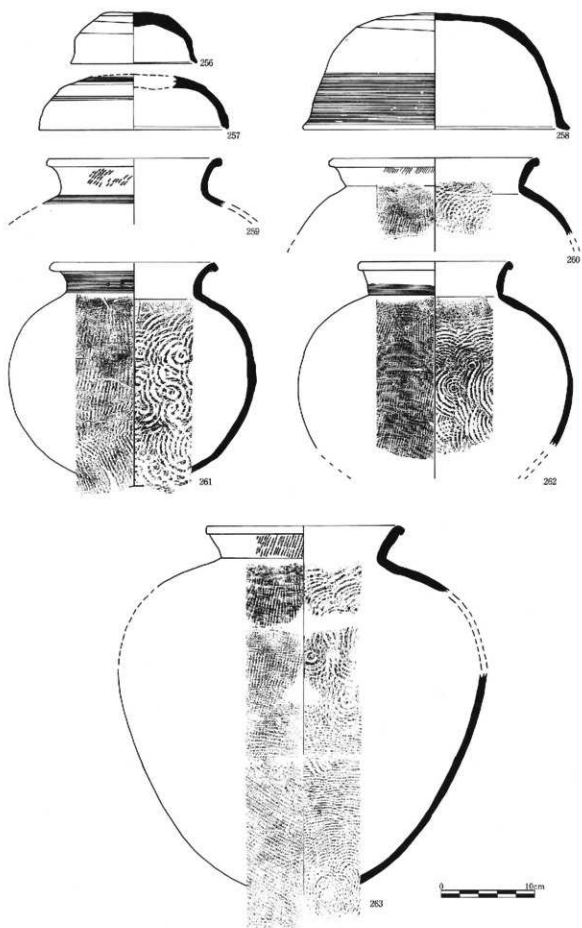


图38 1区出土须惠器(11)

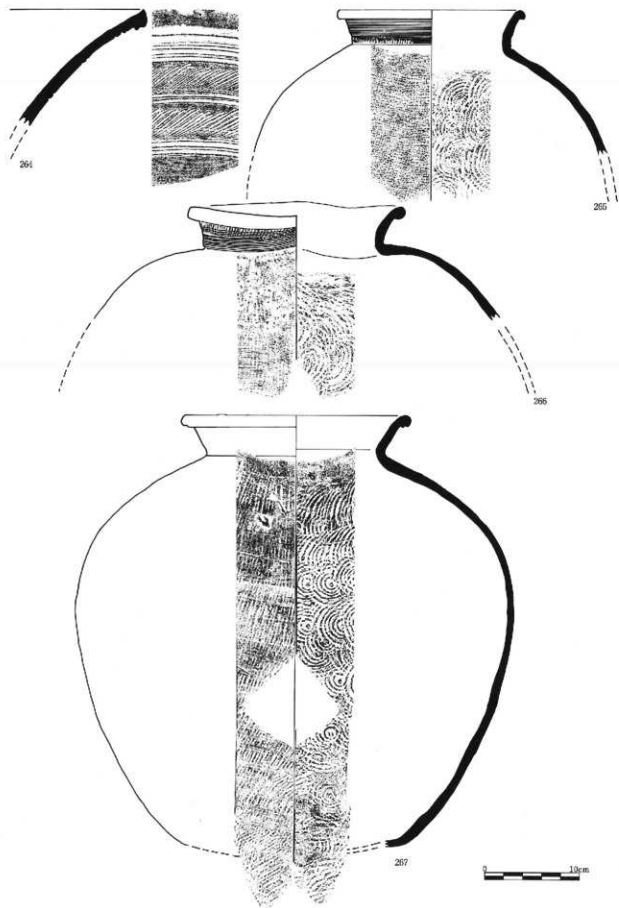


图39 1区出土须惠器(12)

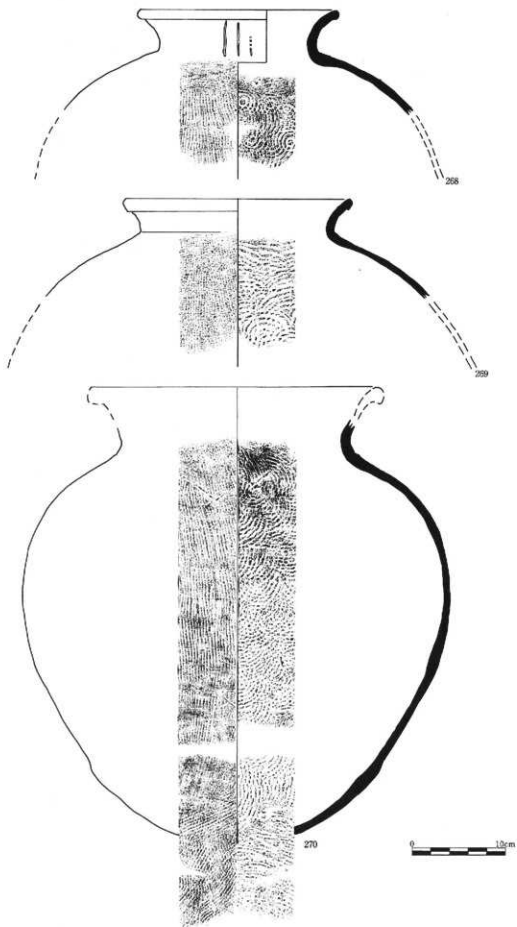


图40 1区出土须惠器 (13)

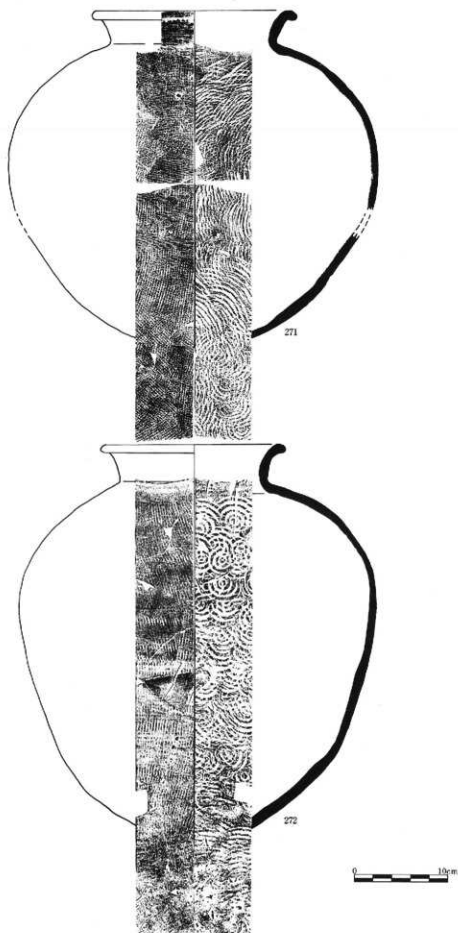


图41 1区出土须惠器(14)

の同心円タタキを残す。頸部と体部外面上半をたたいた後、カキ目仕上げするものもある(図38～41)。把手杯甕は扁平の体部に頑丈な把手をつけ、短い頸部がひらく(220)(図33)。

甕の蓋と思われる鉢形の蓋がある(256)～(259)。鉢と峻別できる違いは口縁端部を平たく厚く作り出す。外面は杯蓋のつくりと共通し、回転ヘラ削りで屈曲部を明瞭にするものと緩やかに曲げるものがある。大型のものは外面にカキ目が残り、口径28.4cm、高さ12.7cmを測る(図38)。

陶棺は須恵質の小片で底部外面の破片と考える。円筒形の脚部がはずれる。厚さ1cm程度で、内面は粗くヘラ削りし、外面はハケ調整する(1)・(2)(図17)。

乾燥台は窯内部での発見例があり、焼き台とも考えられる。今回調査では11個体発見されたが、口径・器高はまちまちで同じ形態はない。天井部は無調整で中央を大きく穿孔し、体部に円形や方形の透かし穴を開ける。端部は厚く平らに仕上げる。内外面共にナデ仕上げする(22)・(24)・(26)・(31)(図27)。

c. 古墳時代後期の遺物(2区)

2区出土遺物も六世紀後半の須恵器が大半で、その他に同時期の土師器小壺がある。須恵器は杯・高杯・鉢・壺・器台・コシキ・甕などと、陶製紡錘車がある(図42～47 図版4～6)。

土師器小壺は手づくねで、ロクロを使用しない(図26 図版6)。高さ6～10cm、口径4.4～8.1cmである。頸部を明確に作り出すものと曖昧なものがあり、底部は2cm以上の厚みのものがある(18)～(20)。その他、土師器の甕小片がある。

乾燥台は窯道具としての焼き台と報告される場合もある。口径10.4～36.8cm、高さ4.2～16.4cmと規模はまちまちである。天井部は無調整で中央を大きく穿孔し、体部に円形や方形の透かし穴を開ける。端部は厚く平らに仕上げる。内外面共にナデ仕上げする(23)・(25)・(27)～(30)・(32)。二次焼成を受けたような痕跡はない(図27 図版6)。

須恵器杯蓋(273)～(288)・(324)～(327)は口径13.1～15.2cm、高さ3.6～4.3cmである。焼きが甘く乳白色のものや、ひずみが強く正円にならないものが目立つ。口縁端部は丸く仕上げるもの、やや尖らせるものがある。外面は屈曲が明快で沈線を施すもの、なだらかに丸く仕上げるものがある。天上部はどれも丁寧に回転ヘラ削りを施す(図42・43)。

杯身(289)～(323)・(328)～(339)は口径11.8～16.8cm、高さ3.2～5.3cmである。これらも焼きが甘く乳白色のものや、ひずみが強く正円にならないものが目立つ。口縁部は内傾するものが大半で、湾曲して端部のみ直立するもの、短く直立気味のものもある。口縁端部は、丸く仕上げるもの、やや尖らせるものなどの多様性がある。外面はなだらかに丸く仕上げ、天上部は丁寧に回転ヘラ削りを施す(図42・43)。

高杯は長脚二段透かしのもので低脚で一段透かし、あるいは透かし穴をもたないものがある(342)～(350)。長脚の高杯は有蓋と無蓋がある。有蓋高杯は脚部にカキ目を施し、端部を尖らせ

る。二段の透かし穴があり、下の段は上の段の半分ほどの長さである。その蓋は頂部につまみがあり、屈曲部が明瞭でなく、なだらかで端部を丸く仕上げる。焼成前に「一」形のヘラ記号をもつ。無蓋高杯は杯部がラップ状に開き、屈曲部に段を多重に施す(図44)。

低脚の高杯にも有蓋と無蓋があり、両者とも蓋杯を転用したつくりである。透かし穴は長方形で三方向のものと四方向のもの、穴を開けるものなどがある。脚端部は平たく仕上げるものと尖らせて接地させるものがある(図44)。

ハソウは頸部に段を設け、ラップ状に開く。体部は小さくほぼ球形にし、底部を丸く削りだすものと平たくするものがある(355)～(361)。頸部外面をカキ目仕上げるもの、波状紋や刺突紋の加飾を伴うものがある(図44)。

壺は長頸と短頸、台付のものもある。長頸壺はラップ状の頸部に波状紋の加飾を施すもの(351)、直立気味のものがある(379)。後者には蓋が伴うと考える(369)・(370)。体部は屈曲部を沈線で区切るもの、刺突紋などで加飾するものがある。短頸壺は扁平の体部で底部を丸く仕上げる小型品である(366)～(368)。短頸壺の蓋は扁平な皿状で口径12cm、高さ2.4cmとなる(365)(図45)。

台付壺は二段透かしのもの、三方向の円形透かしのもの、透かし穴のないものがある。脚端部は平たく仕上げる(図45)。

金属器模倣と考える大型鉢は杯端部が外湾し、屈曲部に段を設け、発達した高台をもつ(362)。内外面とも丁寧になで仕上げる(図44)。岡山県玉藻山古墳出土例があり、器台として使われたようだ。また、奈良時代初頭の漆器では奈良県長屋王邸宅跡出土例がある。

提瓶は口縁部を折り返し、丸く分厚く仕上げるものと、直立気味に尖らせるものがある(381)～(383)。体部はカキ目仕上げし、肩に鉤形の把手を付ける。体部を横向きにし、「II」形の把手をつけるものもある(354)(図44・46)。

横瓶は砲弾形で、口縁部を丸く仕上げる(371)・(372)・(388)(図45・47)。

コシキは口縁部を平らにし、体部をなで仕上げし、二方向の把手をつける(384)～(386)。底部に大きく透かし穴を施す。いずれも焼が甘く、灰白色・乳白色である(図46)。

甕は頸部が小さいもの、長く波状紋の加飾があるもの、体部は柿の実形か球形で、口縁端部を折り返して下方向に屈曲するもの、丸く仕上げるものなどがある(387)・(389)～(391)。大半は体部外面に格子目タタキを、内面に青海波紋の同心円タタキを残す。頸部と体部外面上半をたたいた後、カキ目仕上げするものもある(図47)。

甕の底部には焼成時に蓋杯を貼り付けて固定した痕跡が目立つ。これまで、焼台と考えられていた鉢状のものがあつた痕跡ではなく(22)～(32)、窯詰めの実態を示唆すると考える。

把手杯甕は扁平の体部に頑丈な把手をつけ、短い頸部がひらく(363)(図44)。

甕の蓋と思われる鉢形の蓋がある(352)。鉢との違いは口縁端部を平たく厚く作り出すことだ。大型で外面に鉤状の把手が付き、口径15.2cmを測る(図44)。

陶製紡錘車は直径3.2cmの円形で、中央に穿孔がある(364)(図45)。

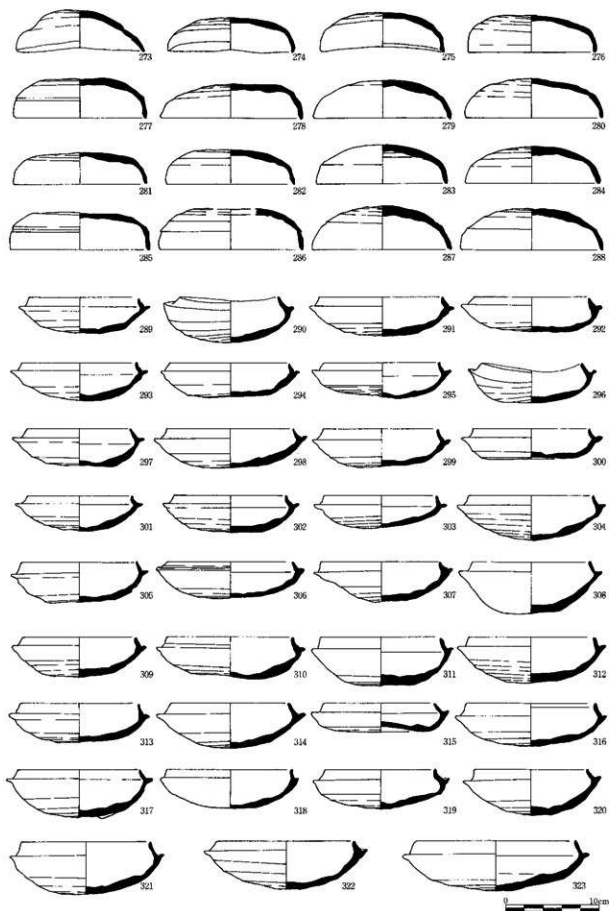


图42 2区出土须惠器(1)

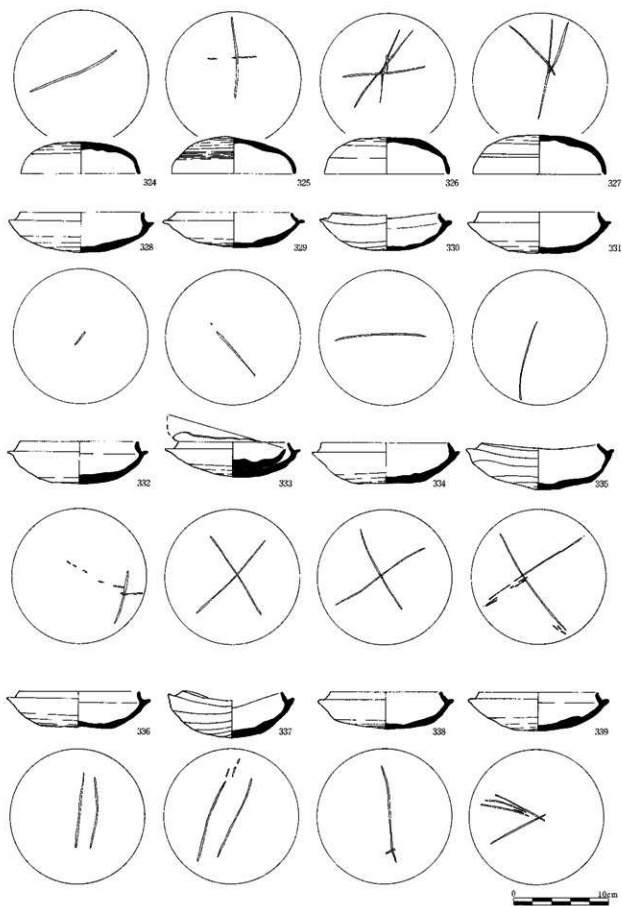


图43 2区出土须惠器(2)

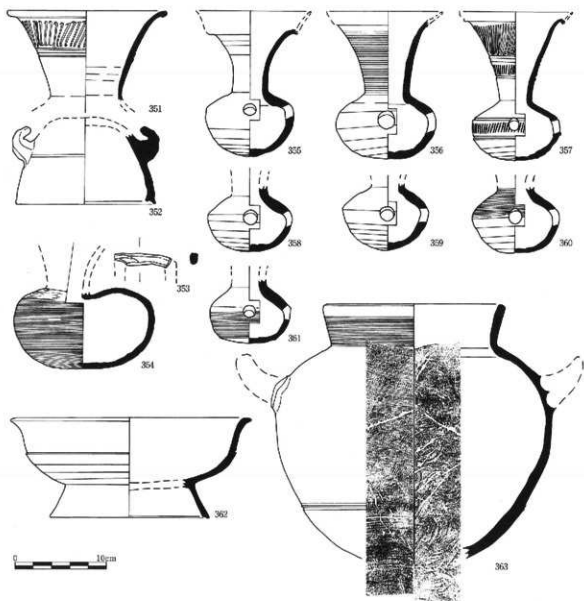
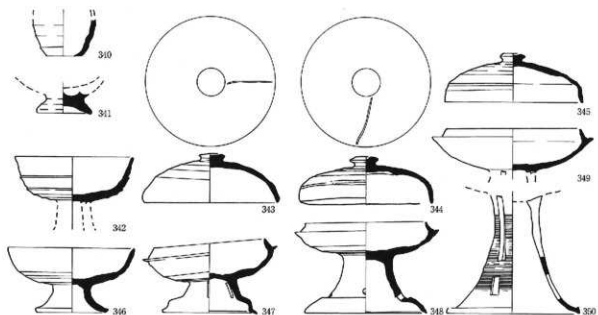


图44 2区出土须惠器(3)

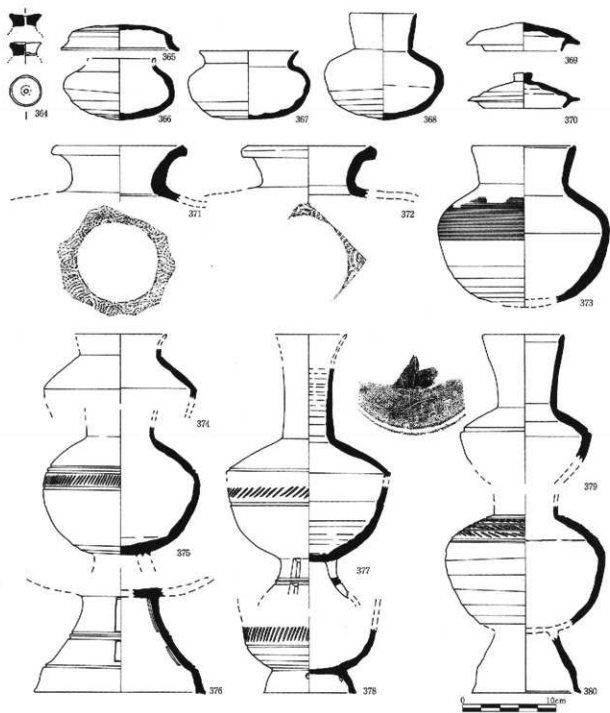


图45 2区出土须惠器(4)



图46 2区出土须惠器(5)

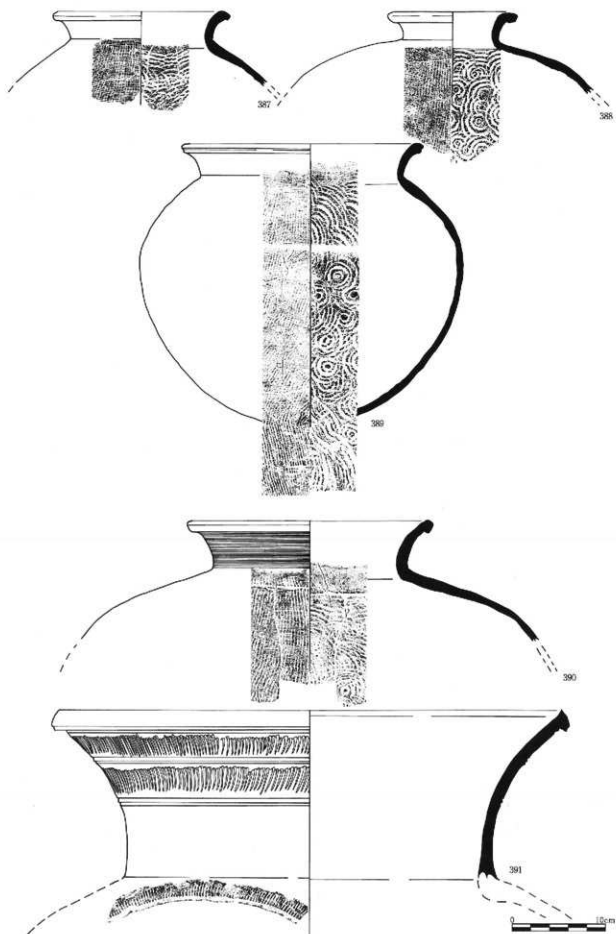


图47 2区出土须惠器(6)

d. 古墳時代後期の遺物（3～8区）

3～8区出土遺物も六世紀後半の須恵器が大半で、少量の土師器がある。須恵器は杯・高杯が大半で、鉢・壺・器台・コシキ・甕などがある（図48～50）。

8区は1・2区同様に溝などからまとまった出土が見られた。その一方、3～7区は削平によって土器は小片となって、水田床土に含まれていた。7区は長脚二段透かし高杯の出土が目立つ。

須恵器杯蓋（392）～（395）・（466）～（475）は口径11.2～16.2cm、高さ3.6～4.1cmである。焼きが甘く乳白色のものや、ひずみが強く正円にならないものが目立つ。口縁端部は丸く仕上げるもの、やや尖らせるものがある。外面は屈曲が明快で沈線を施すもの、なだらかに丸く仕上げるものがある。天上部はどれも丁寧に回転ヘラ削りを施す（図48・50）。

杯身（396）～（411）・（476）～（495）・（499）は口径8.8～16.4cm、高さ2.7～5.3cmである。これらも焼きが甘く乳白色のものや、ひずみが強く正円にならないものが目立つ。口縁部は内傾するものが大半で、湾曲して端部のみ直立するもの、短く直立気味のものもある。口縁端部は、丸く仕上げるもの、やや尖らせるものなどの多様性がある。外面はなだらかに丸く仕上げ、天上部は丁寧に回転ヘラ削りを施す（図48・50）。

高杯は長脚二段透かしのもので低脚で一段透かし、あるいは透かし穴をもたないものがある（412）～（434）・（500）～（502）。長脚の高杯は有蓋と無蓋がある。二段の透かし穴があり、下の段は上の段の半分ほどの長さのもの、ほぼ同じ長さのものがある。

低脚の高杯にも有蓋と無蓋があり、両者とも蓋杯を転用したつくりである。透かし穴は長方形で三方向のものと四方向のもの、穴を開けるものなどがある。脚端部は平たく仕上げるものと尖らせて接地させるものがある（図47・50）。

ハソウは頸部に段を設け、ラッパ状に開く。体部は小さくほぼ球形にし、底部を丸く削りだす（442）～（444）。頸部外面を波状紋や刺突紋の加飾を伴うものがある（図49）。

壺は長頸と短頸がある。長頸壺はラッパ状の頸部で（445）・（446）、体部に加飾するものもある（447）。短頸壺は扁平の体部で底部を丸く仕上げる（448）～（450）・（503）。短頸壺の小型は口径6.4cm、高さ4.1cmとなる（451）（図49・50）。

器台は脚外面をハケメ調整し、方形透かしを三方向にあげる（463）～（465）（図49）。

提瓶は口縁部を直立気味に尖らせる（437）～（441）（図49）。

こね鉢は体部中央に沈線があり、底部を厚く平らにする（504）。この器種の小型品と考える口径8.1cm高さ4.4cmと（497）、口径10cm高さ5.7cmのラッパ状に開く鉢がある（435）（図49・50）。

甕は頸部が小さく、口縁端部を折り返して下方向に屈曲するもの、丸く仕上げるものなどがある（452）～（462）・（505）。大半は体部外面に格子目タタキを、内面に青海波紋のタタキ目を残す。頸部と体部外面上半をたたいた後、カキ目仕上げするものもある（図49・50）。

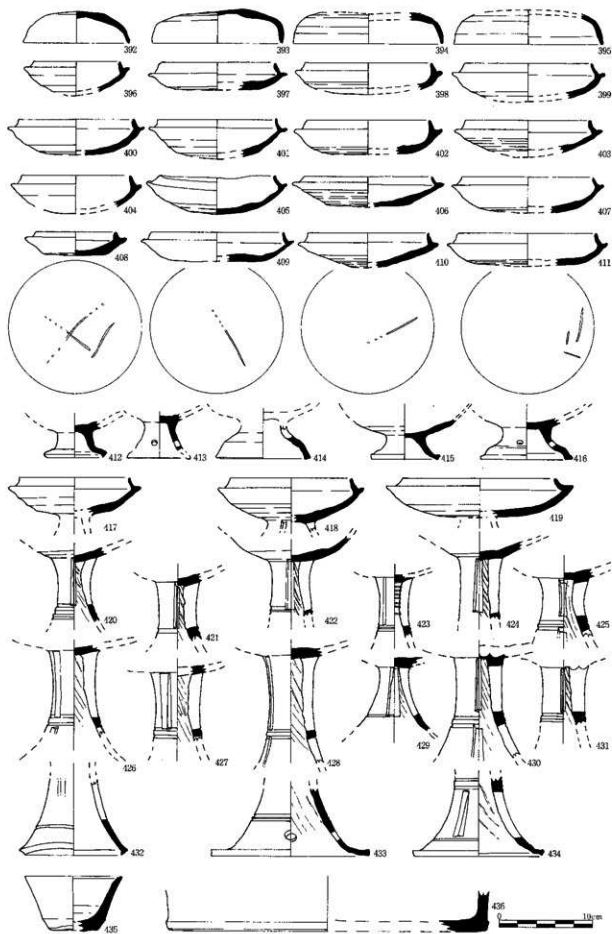


图48 4~7区出土须惠器(1)

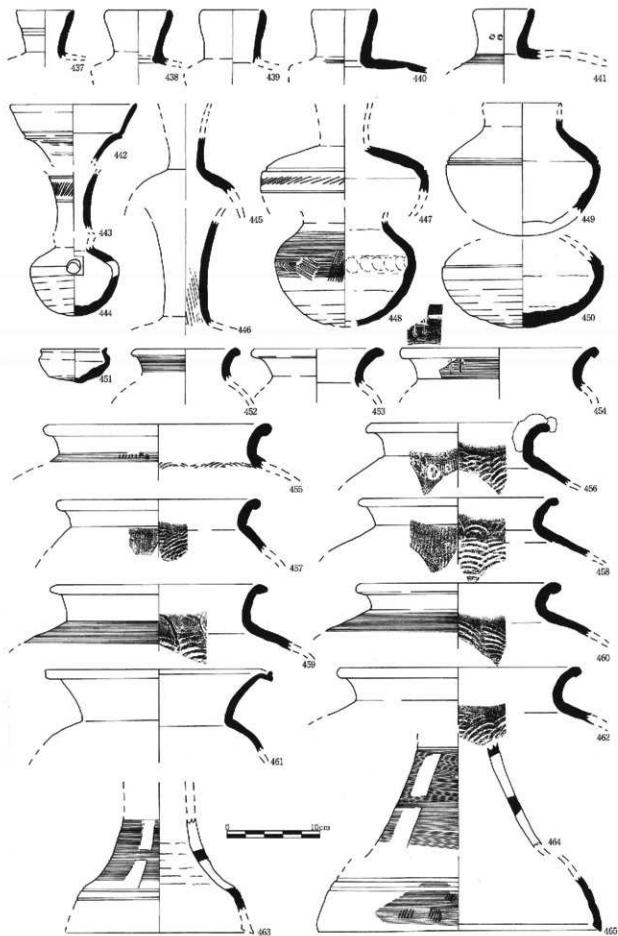


图49 4~7区出土须惠器(2)

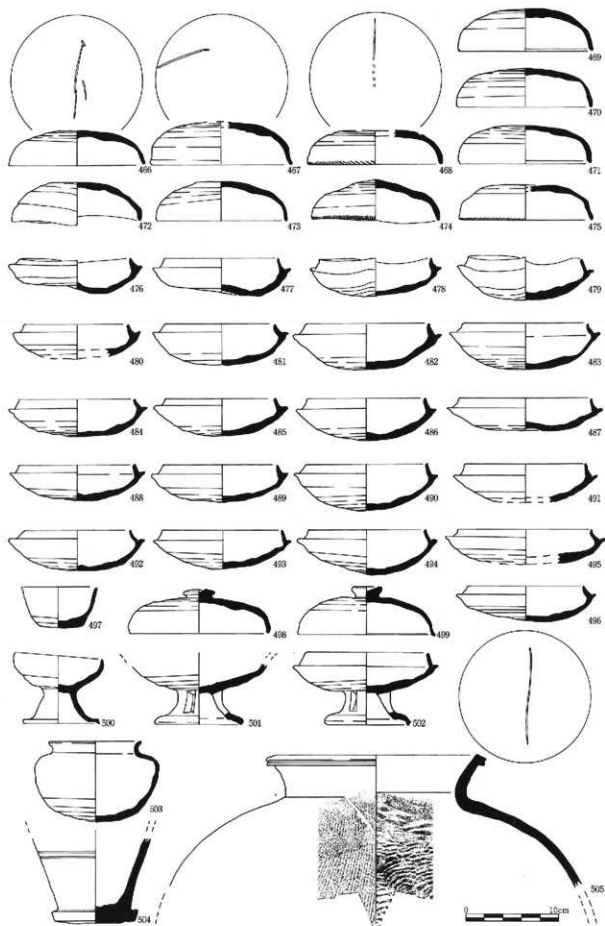


图50 8区出土须惠器

e. 古代の遺物 (1～8区)

奈良時代の須恵器蓋杯(4)～(6)が5区と7区から、平安時代の碗・壺が1c区・6区・7区から発見されている(7)～(11)。いずれも同時期の遺構に伴うものではない。奈良時代の遺構・遺物は92年度調査や03年度調査で数多く発見されており、この頃まで陶器山地区では古墳時代以来の生産体制が続いていたようだ。平安時代の遺物は02年度調査や98年度調査で少量発見されるとどまり、陶器山地区での須恵器生産体制の変化は判然としな(図22 図版7)。

杯身は(5)・(6)、ハ字形に開く短い高台をもつ。立ち上がりが明瞭な段となり、奈良時代前期と考える。蓋は厚みが均質で作りも丁寧になることから、奈良時代でも古い段階だろう(4)。碗(7)は、底部に糸切痕をもつ小片である。平安時代前期のものか。

壺は、高台をもつ小片で、底部と体部は厚い(8)～(11)。

f. 中世の遺物 (1～8区)

鎌倉～室町時代の中国製白磁・青磁、瓦器碗・皿、土師器皿、瓦質・土師質羽釜・甕、東播系すり鉢、瓦などが出土している。出土は1区・6区に集中するが全体量は多くない(図51・52 図版7・8)。

中国製磁器は碗・皿の小片ばかりで、白磁は少ない。青磁碗は青白色で胎土が白く緻密な龍泉窯系のもが少量と、緑褐色で胎土に不純物を含む同安窯系のものに分けられる。青磁碗には口縁端部を外反させ、凌ぎ連弁紋を加飾する龍泉窯系のもがある(519)。いずれも高台は無釉で、見込みは蛇ノ目ハギを施す。高台無釉薬で、内面に沈線がめぐるものもある。

青磁皿は、内外面ともに施釉され、見込みに印刻で草花紋をかざる同安窯系のもがある(515)。

瓦器皿は口径8cm程度で、器高は低く口縁部のナデは強い。暗紋はない(507)～(511)。

瓦器碗は口径13cm程度で、高台や暗紋が省略される室町時代にくだるものがある(513)・(514)。

土師器皿は立ち上がりを明瞭に屈曲させるものと、緩やかに傾斜させるものがある(512)。

土師質羽釜は口縁部が内傾し、外面に沈線がめぐる。口縁端部は平らにするものとやや丸みをもたせるものがある。体部内面はハケ調整、外面はヘラ削りを施す(520)～(529)。

東播系すり鉢は口縁部がとがるもの、薄くやや丸く仕上げるものがある(530)～(534)。いずれも口径は24cm程度、瓦質すり鉢は東播系と形態が共通し、内面に密な挿目を入れる(533)。

土師質甕は大小二種類ある。口縁部は直下で折り返す短い頸部となり、外面に粗いタタキ目、内面はハケメ仕上げする。大型の口径は45cm程度、小型の口径は20cm程度である(535)～(537)。

瓦は5～7区から散在して発見された。軒平瓦は二点発見され、外縁が厚く高い唐草紋の同范瓦である(540)・(541)。軒丸瓦は珠紋を伴わない巴紋である(542)・(543)。

平瓦は厚さ2.5cm程度の厚手の大型品で(546)～(550)、凸面はナデ仕上げされ、凹面は布目が

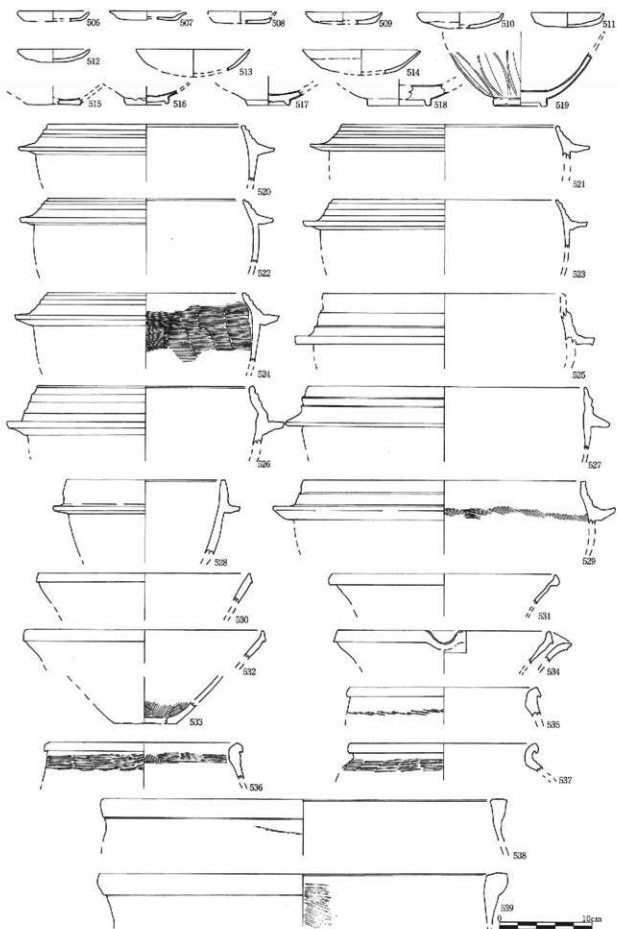


図51 中世の遺物 (1)

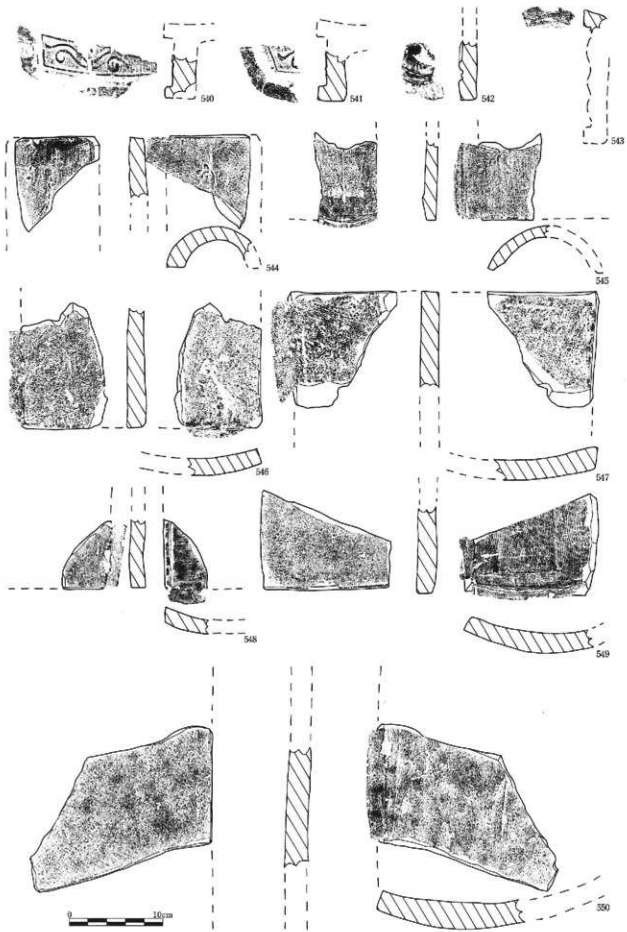


図52 中世の遺物 (2)

g. 近世の遺物（1～8区）

今回調査区からは中世末以降の遺物もみついている。いずれも遺構に伴うものではなく、現代までの水田耕土・床土などに含まれていた。発見遺物は陶磁器と瓦で、中世末から近世末まで一定量がみられる。17世紀前半代は唐津焼が目立ち、陶器落入植時の動向をがすものだろう。18世紀代は「くらわんか」碗がふえ、19世紀代は肥前磁器に瀬戸・美濃焼磁器・京焼系の陶磁器など様々な産地の遺物が混ざるようになる（図53 図版8）。

中国製磁器は白磁（554）と青花（551）～（553）・（555）・（560）がある。いずれも小片だが、17世紀前半までのものとする。白磁皿（554）は端反碗で、厚みは薄く0.2cmである。口径12.0cmを測る。青花は皿（551）・（553）と碗（552）・（555）・（560）がある。青花皿（551）は口径12.0cmを測る。内面に二条の線を描く皿（553）は口径12.9cmを測る。小型の青花碗（552）は口縁部が直立気味で口径9.0cmを測る。外面を加飾する碗（555）には唐草紋を刻むもの、見込みに花卉文を刻むもの（560）があり、後者は高台径5.2cmを測る。

国産磁器には肥前磁器（556）～（559）・（561）～（564）・（566）～（569）と瀬戸・美濃焼磁器（565）がある。青磁碗（556）は全体に青磁釉をかけ、畳付けのみ無釉である。一重網目文碗（557）は高台径3.6cmを測る。コンニャク印判文碗（558）・（567）は、（558）が全体に薄手で丁寧なつくりの高台をもつことに対し、厚手の浅い碗もある（567）。「くらわんか」碗と呼ばれるものには（559）・（561）～（562）・（566）～（569）がある。二重網目文碗（559）は高台径3.7cmを測る。また、梅枝文碗（569）は見込みに蛇の目釉剥ぎを施す。口径10.8cm、器高4.4cm、高台径4.7cmを測り、厚手の浅い碗である。

瀬戸・美濃焼磁器染付碗（565）は腰が張り、口縁部が開く碗である。高台径4.2cmを測る。

国産陶器には唐津焼（570）～（576）・（587）、瀬戸・美濃焼（578）、京焼系（580）・（581）・（582）、丹波焼（579）・（588）、堺焼（585）・（586）がある。唐津焼は皿（570）～（574）、碗（575）～（577）、鉢（587）がみついている。皿（570）は見込みに蛇の目釉剥ぎを施し、内面から外面にかけて透明釉をかける。高台径3.0cmを測る。刷毛目文皿（572）は赤褐色の胎土の上に白泥を刷毛で装飾し、高台畳付け見込みに砂目痕が残る。鉄絵皿（574）は見込みと高台付近くに4箇所目痕が残る。高台は削りが浅く、高台径3.8cmを測る。灰釉碗（576）は高台内の削りは浅く、高台径5.2cmを測る。三鳥手鉢（587）は口縁部を屈曲させ、端部を上方へ引き上げる。口径29.9cmを測る。

瀬戸・美濃焼陶器碗（577）は緑釉を掛け、表面に貫入が入る。付け高台の径は5.8cmを測る。

京焼系陶器は灯火具（580）・（581）を中心に、土鍋、土瓶などがみついている。皿形の灰釉灯明皿（581）は内面に櫛掻きがあり、口径11.2cmを測る。内面に返りがある灰釉灯明受皿（580）は外面には重ね焼きの痕跡が残る。口径8.9cmを測る。脚をもつ灰釉有脚灯明皿（582）は脚部の下に皿で油を受ける形である。口縁端部に煤が付着し、上部皿口径6.1cm、下部口径6.5cm

を測る。釉薬はオリーブ色に発色し、形も一般的にみられる京焼系の有脚灯明皿とは異なる。他産地の可能性もある。

丹波焼徳利 (579) は外面に鉄釉を掛け、底部は釉薬を拭い、砂が付着する。底径6.8cmを測る。甕 (588) は外面に鉄釉を掛ける。底部は釉薬を拭い、砂が付着する。底径13.6cmを測る。

堺焼播鉢 (585) の摺目の単位は10本単位で、口径28.6cmを測る。見込み部分の破片は (586)、摺目がいわゆる「ウールマーク形」である。底径11.2cmを測る。

他に、肥前磁器碗を転用した加工円盤 (583)・(584) が二つある。ひとつ (583) は縦3.3cm、横2.8cm、ひとつ (584) は縦4.7cm、横4.7cm、厚さ0.5cmを測る。

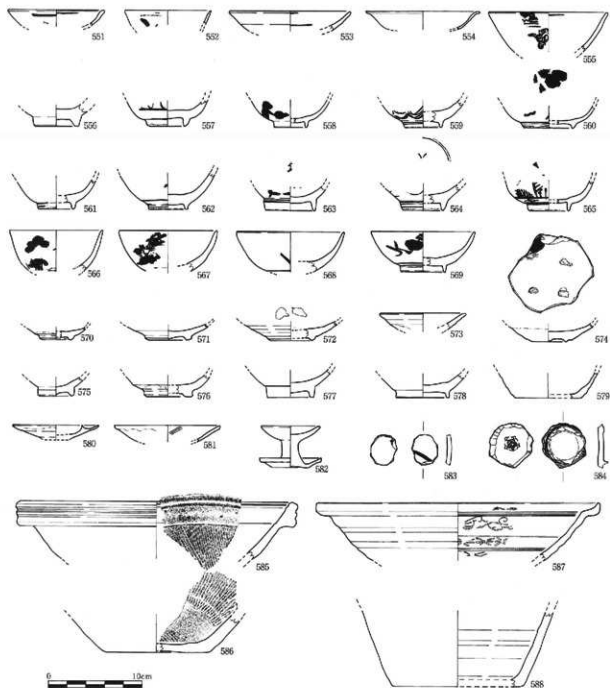


図53 近世の遺物

第Ⅲ章 まとめ

今回調査では1・2区から古墳時代後期の遺物が大量に発見された。これらは生焼けのものや焼ひずみのはなはだしいものが多く含まれており、この集落で備蓄や選別が行われていたと考えられる。つまり、須恵器工人の集落と須恵器の集積地だろう。器台・大型の高杯・横瓶など、古墳への副葬品やイイダコ壺などの生産用具を含む点も工人集落の特徴をよく示す。

出土須恵器からみる集落の時期は近畿で群集墳がもっとも隆盛する六世紀後半のMT85～TK43段階である。蓋杯の口縁端部形態など、一つ一つにはその前後段階の特徴を備えるものもふくまれるが、これらは段階内での多様性とかんがえ、時期差を示すかどうか疑問しい。とすれば、この集落の存続期間を短く見積もることも可能であるが、集落の中心をずらして奈良時代前期まで機能が続いていたと考える。これまでの調査では須恵器が定型化する五世紀後半のTK208～TK47段階の窯や遺物が知られる。ところが、MT15段階は知られない。

出土須恵器は土坑や溝から発見されるとともに、上層の水田耕土や床土にも完形に近い形で散乱していたことから、もともと遺構に含まれる形で投棄されていたものか、後世の土地改変で投棄されたものか判然としにくい。例えば、須恵器生産が行われていたところは余地に山積みされていたものかもしれない。これらが後世の耕作に伴って、溝や土坑に投棄されたかもしれない。

また、蓋杯には焼ひずみがはなはだしいものが多く、もともと大甕や壺などをあな窯の床面に固定するための焼台に転用されていた可能性もある。大甕の底部には杯のあたっての痕跡が明瞭に残されているものが目立ち、自然釉のかけ具合から、甕底部に杯が固定されていたことがうかがえる。

その他、金属器を模倣した大型の鉢は見本品を手元においての製作か、それを模倣した木器・漆器のさらなる模倣か興味もたれる。岡山県王墓山古墳に類例があり、六世紀後半段階という仏教思想などの流入段階に須恵器工人がいち早くこのような大型品の生産を手がけていたことは、渡来人などの影響も看取できる。以上の生産体制は、陶器遺跡周辺では奈良時代前期まで続けられ、律令体制への移行期に画期が見出せないことも重要だろう。

平安時代以降、須恵器生産後の土地利用は耕地化が徐々に進んだと考える。03年度調査区や今回調査の6区で発見された方形区画の屋敷地は中世後半に有力者の台頭がうかがえる。これらの地元勢力は近世の陶器藩にどのように吸収されていくのか興味もたれる。いずれも、近世前期以降の遺物が少なく、示唆的である。

文献史料によると、江戸時代前期に陶器藩による該当地域の新田開発が進んだことが知られる。新たな入植者は福田村などをつくったといわれる。陶器遺跡の現在の水田畦畔には江戸時代前期の唐津焼・肥前磁器などが含まれ、史料に合致する。また、江戸時代後期から末にかけての陶磁器がみられる部分もある。第二段階の水田開発が裏作の充実を考えるか、人口増加・生活上などを示すものと思われる。

図 番号	実測 番号	地区	遺構・土層	器 種	残存 率	図 番号	実測 番号	地区	遺構・土層	器 種	残存 率
1	36	1a	溝1-53上層	漆器	5	82	186	1a	溝1-59	漆器	2
2	29	1a	溝1-53上層	漆器	5	80	179	1a	埴山直上	漆器	2
3	546	1a	埴山直上	漆器	5	81	174	1c	溝1-2上層	漆器	2
4	457	5	溝5-1	漆器	5	92	175	1a	溝1-59上層	漆器	1
5	554	7	灰層土	漆器	5	93	100	1a	溝1-59	漆器	2
6	550	7	灰層土	漆器	5	94	171	1c	溝1-6	漆器	2
7	482	6	灰層土	漆器	5	95	178	1c	土塚1-8	漆器	2
8	376	1c	溝1-1上層	漆器	5	96	184	1a	溝1-59	漆器	1
9	359	7	灰層土	漆器	5	97	180	1a	大土塚1-1	漆器	2
10	553	1a	溝1-53上層	漆器	5	98	185	1c	土塚1-8	漆器	2
11	377	1c	溝1-2上層	漆器	5	99	189	1d	溝1-12	漆器	2
12	339	1c	灰層土	ナイフ形石鏝	1	100	104	1a	溝1-51上層	漆器	1
13	397	1c	埴山直上	打丸石鏝	1	101	168	1c	溝1-6	漆器	2
14	340	2	灰層土	打丸石鏝	1	102	176	1c	溝1-14	漆器	1
15	269	1c	溝1-53下層	鏡	1	103	170	1c	大土塚1-1	漆器	5
16	313	2	埴山直上	土師器小埴	4	104	185	1a	溝1-59	漆器	2
17	312	2	埴山直上	土師器小埴	4	105	164	1c	土塚1-8	漆器	2
18	80	1a	溝1-53上層	土師器小埴	4	106	177	1c	溝1-5	漆器	2
19	79	1a	溝1-53上層	土師器小埴	4	107	172	1c	溝1-1	漆器	2
20	110	2	埴山直上	土師器小埴	4	108	308	1c	溝1-6	漆器	2
21	282	2	溝2-1	土師器小埴	4	109	387	1c	溝1-2上層	漆器	1
22	32	1a	溝1-59	漆器	5	110	386	1d	溝1-12	漆器	1
23	108	2	土塚2-6上層	漆器	5	111	390	1c	土塚1-8	漆器	1
24	30	1c	溝1-5	漆器	2	112	353	1a	溝1-59	漆器	1
25	105	2	埴山直上	漆器	2	113	393	1c	大土塚1-1	漆器	1
26	24	1a	溝1-59	漆器	2	114	399	1c	溝1-6	漆器	2
27	276	2	溝2-5	漆器	5	115	391	1c	大土塚1-2	漆器	1
28	107	2	溝2-5	漆器	5	116	351	1a	溝1-59	漆器	1
29	216	2	溝2-1	漆器	2	117	348	1a	溝1-59	漆器	2
30	106	2	埴山直上	漆器	2	118	352	1a	溝1-59	漆器	2
31	31	1a	溝1-59	漆器	2	119	198	1a	溝1-59	漆器	2
32	318	2	埴山直上	漆器	5	120	305	1c	溝1-6	漆器	2
33	86	1a	溝1-53上層	漆器	2	121	389	1c	溝1-2上層	漆器	1
34	97	1a	溝1-59	漆器	2	122	394	1a	溝1-59	漆器	1
35	278	1c	溝1-11	漆器	2	123	302	1a	溝1-53下層	漆器	2
36	88	1a	溝1-53下層	漆器	2	124	354	1a	溝1-59	漆器	1
37	98	1a	溝1-59	漆器	3	125	306	1c	溝1-6	漆器	2
38	253	1a	溝1-59	漆器	2	126	307	1c	溝1-6	漆器	1
39	95	1a	溝1-53	漆器	1	127	355	1c	溝1-14	漆器	2
40	257	1c	溝1-12	漆器	1	128	103	1a	溝1-59	漆器	2
41	254	1a	溝1-12	漆器	1	129	81	1a	溝1-59	漆器	2
42	95	1a	溝1-59	漆器	2	130	89	1a	溝1-53下層	漆器	2
43	99	1a	溝1-59	漆器	2	131	249	1a	溝1-53下層	漆器	1
44	256	1c	溝1-16	漆器	1	132	85	1a	溝1-53下層	漆器	2
45	252	1a	溝1-59	漆器	2	133	250	1a	溝1-59	漆器	2
46	82	1a	大土塚1-8	漆器	2	134	87	1a	溝1-53下層	漆器	2
47	255	1d	溝1-12	漆器	1	135	83	1a	溝1-53下層	漆器	2
48	277	1d	溝1-12	漆器	2	136	20	1c	溝1-5上層	漆器	1
49	207	1c	溝1-12	漆器	1	137	304	1c	大土塚1-1	漆器	1
50	205	1a	溝1-59	漆器	2	138	16	1a	溝1-59	漆器	1
51	41	1c	溝1-51上層	漆器	2	139	19	1a	溝1-59	漆器	2
52	202	1a	溝1-59	漆器	2	140	287	1b	溝1-51	漆器	1
53	288	1a	溝1-59	漆器	1	141	208	1c	溝1-5	漆器	1
54	21	1c	灰層土	漆器	1	142	44	1c	溝1-2	漆器	1
55	58	1d	溝1-12	漆器	2	143	42	1c	溝1-2	漆器	2
56	292	1c	溝1-12	漆器	1	144	299	1a	溝1-53下層	漆器	1
57	396	1c	大土塚1-1	漆器	1	145	14	1a	溝1-59	漆器	2
58	37	1a	溝1-59	漆器	1	146	40	1c	大土塚1-1	漆器	1
59	350	1a	溝1-59	漆器	1	147	63	1a	溝1-59	漆器	2
60	55	1a	溝1-53下層	漆器	1	148	54	1a	溝1-53	漆器	2
61	17	1a	溝1-51	漆器	1	149	39	1c	溝1-6	漆器	1
62	43	1d	溝1-12	漆器	1	150	15	1c	溝1-1	漆器	1
63	301	1a	溝1-53下層	漆器	2	151	385	1a	溝1-59	漆器	1
64	293	1c	溝1-1上層	漆器	2	152	173	1c	溝1-1	漆器	2
65	16	1c	埴山直上	漆器	2	153	183	1a	溝1-59	漆器	2
66	92	1a	溝1-59	漆器	2	154	182	1a	溝1-59	漆器	2
67	57	1c	溝1-1	漆器	2	155	150	1a	溝1-59	漆器	2
68	22	1c	溝1-16	漆器	1	156	167	1c	溝1-6	漆器	4
69	295	1c	大土塚1-2上層	漆器	1	157	294	1c	灰層土	有蓋漆器	4
70	300	1a	溝1-53下層	漆器	1	158	151	1a	溝1-59	有蓋漆器	5
71	289	1a	灰層土	漆器	1	159	233	1a	溝1-59	有蓋漆器	4
72	51	1c	土塚1-8	漆器	1	160	234	1c	溝1-6	有蓋漆器	1
73	388	1c	溝1-17	漆器	1	161	231	1c	溝1-6	有蓋漆器	1
74	48	1c	溝1-16	漆器	1	162	48	1a	溝1-59	有蓋漆器?	4
75	47	1c	埴山直上	漆器	1	163	35	1a	溝1-53下層	有蓋漆器	5
76	50	1c	土塚1-8	漆器	1	164	232	1c	溝1-1	有蓋漆器	2
77	199	1a	溝1-59	漆器	2	165	149	1a	溝1-59	有蓋漆器	1
78	59	1d	溝1-12	漆器	2	166	576	1a	溝1-49	有蓋漆器	5
79	296	1c	大土塚1-2	漆器	1	167	102	1c	溝1-12上層	有蓋漆器	4
80	53	1a	溝1-53下層	漆器	1	168	235	1c	大土塚1-2	有蓋漆器	4
81	49	1a	溝1-59	漆器	1	169	146	1b	溝1-59	有蓋漆器	4
82	50	1a	溝1-51上層	漆器	1	170	147	1b	溝1-59	有蓋漆器	4
83	291	1c	土塚1-8上層	漆器	1	171	120	1c	土塚1-51	無蓋漆器	2
84	61	1a	溝1-59	漆器	2	172	381	1c	溝1-14	無蓋漆器	2
85	297	1a	溝1-51	漆器	1	173	128	1a	溝1-59	無蓋漆器	2
86	56	1a	溝1-59	漆器	1	174	383	1c	溝1-17	無蓋漆器	2
87	203	1a	溝1-59	漆器	2	175	129	1a	溝1-59	無蓋漆器	2
88	166	1c	土塚1-8	漆器	2	175	126	1a	溝1-59	無蓋漆器	2

区 番号	実測 番号	地区	遺構・土層	器 種	残存 率	区 番号	実測 番号	地区	遺構・土層	器 種	残存 率
177	121	1c	溝1-59	無蓋漆器	4	265	152	1c	溝1-1上面	瓦	4
178	132	1c	溝1-4上面	無蓋漆器	4	266	296	1c	溝1-5	瓦	2
179	101	1a	大土坑1-1	無蓋漆器	4	267	245	1c	溝1-4	瓦	4
180	117	1a	溝1-59	無蓋漆器	4	268	145	1a	溝1-59	瓦	4
181	118	1c	溝1-59	無蓋漆器	5	269	143	1a	溝1-59	瓦	4
182	122	1c	溝1-2	無蓋漆器	4	270	144	1a	溝1-59	瓦	4
183	124	1c	溝1-2	無蓋漆器	4	271	290	1c	大土坑1-1	瓦	4
184	382	1d	溝1-6	無蓋漆器	5	272	246	1c	溝1-1	瓦	2
185	125	1c	灰層土	無蓋漆器	5	273	335	2	溝2-1上面	瓦	1
186	127	1c	溝1-6	無蓋漆器	5	274	154	2	土坑2-6上面	瓦	1
187	123	1c	大土坑1-2	有蓋漆器	4	275	336	2	溝2-1上面	瓦	1
188	119	1c	溝1-6	有蓋漆器	2	276	209	2	溝2-5	瓦	1
189	131	1a	大土坑1-2	有蓋漆器	1	277	156	2	土坑2-5	瓦	1
190	130	1a	溝1-59	有蓋漆器	2	278	333	2	溝2-1上面	瓦	1
191	5	1c	溝1-59	有蓋漆器	2	279	334	2	溝2-1上面	瓦	2
192	8	1a	大土坑1-2	有蓋漆器	2	280	385	2	溝2-4	瓦	1
193	237	1c	溝1-53	ハコ鉢	5	281	384	2	埴山層上	瓦	2
194	240	1c	溝1-2	ハコ鉢	5	282	424	2	溝2-1上面	瓦	2
195	26	1a	溝1-2	イビダコ壺	1	283	212	2	溝2-6	瓦	1
196	239	1c	溝1-53	ハコ鉢	5	284	157	2	土坑2-9	瓦	1
197	76	1c	溝1-2	小壺	2	285	395	2	溝2-5	瓦	2
198	23	1a	溝1-16	鉢	2	286	413	2	埴山層上	瓦	5
199	236	1c	溝1-53	ハコ鉢	2	287	578	2	溝2-1上面	瓦	4
200	238	1c	溝1-2	ハコ鉢	5	288	579	2	溝2-6	瓦	1
201	70	1c	溝1-2	ハコ鉢	4	289	346	2	溝2-6	瓦	1
202	69	1c	大土坑1-2	ハコ鉢	2	290	228	2	溝2-7	瓦	1
203	192	1c	溝1-1	ハコウ	4	291	222	2	溝2-1	瓦	1
204	1	1a	溝1-6	ハコウ	4	292	580	2	溝2-1上面	瓦	4
205	189	1c	溝1-50	ハコウ	2	293	224	2	溝2-1	瓦	1
206	193	1c	溝1-1	ハコウ	2	294	272	2	溝2-5	瓦	1
207	3	1c	溝1-6	ハコウ	4	295	345	2	溝2-7	瓦	1
208	72	1d	溝1-6	ハコウ	4	296	330	2	土坑2-9	瓦	1
209	196	1c	溝1-12	ハコウ	4	297	342	2	土坑2-6	瓦	1
210	197	1a	大土坑1-2	ハコウ	1	298	402	2	溝2-5	瓦	1
211	190	1a	灰層土	ハコウ	2	299	401	2	溝2-4	瓦	1
212	4	1a	溝1-57	ハコウ	4	300	403	2	溝2-5	瓦	1
213	194	1c	灰層土	ハコウ	4	301	328	2	土坑2-4	瓦	1
214	187	1a	溝1-6	ハコウ	1	302	325	2	土坑2-2上面	瓦	1
215	191	1a	溝1-53	ハコウ	2	303	230	2	溝2-7	瓦	1
216	188	1a	溝1-6	ハコウ	4	304	323	2	土坑2-2上面	瓦	1
217	2	1c	溝1-53	ハコウ	5	305	271	2	溝2-5	瓦	1
218	113	1d	溝1-2	長頸壺	5	308	324	2	土坑2-2上面	瓦	1
219	77	1c	溝1-12	酒斗形手付壺	2	307	223	2	溝2-1上面	瓦	1
220	45	1b	大土坑1-1	酒斗形手付壺	2	308	326	2	土坑2-2上面	瓦	1
221	74	1d	溝1-12	哲筒	5	309	329	2	土坑2-6上面	瓦	1
222	28	1a	溝1-12	哲筒	2	310	227	2	溝2-6	瓦	1
223	67	1a	溝1-59	哲筒	2	311	226	2	溝2-5	瓦	1
224	75	1d	溝1-6	哲筒	4	312	343	2	溝2-5	瓦	4
225	92	1a	溝1-12	哲筒	1	313	344	2	溝2-7	瓦	2
226	93	1c	溝1-59	哲筒	4	314	400	2	埴山層上	瓦	1
227	90	1c	大土坑1-1	哲筒	1	315	229	2	溝2-7	瓦	1
228	91	1a	大土坑1-2	哲筒	1	316	273	2	溝2-5	瓦	1
229	181	1c	溝1-59	長頸壺	1	317	347	2	溝2-6	瓦	1
230	251	1a	灰層土	長頸壺	1	318	327	2	土坑2-5	瓦	1
231	78	1c	溝1-50	台付鉢	4	319	221	2	溝2-1上面	瓦	1
232	25	1c	溝1-11-12	台付鉢	2	320	389	2	埴山層上	瓦	1
233	94	1a	溝1-2	台付鉢	4	321	270	2	溝2-5	瓦	2
234	33	1a	溝1-59	台付鉢	5	322	220	2	溝2-1上面	瓦	1
235	1213	1c	溝1-57	鉢	2	323	422	2	溝2-1上面	瓦	1
236	10	1c	大土坑1-2	鉢	5	324	215	2	溝2-7	瓦	2
237	67	1c	大土坑1-1	鉢	2	325	393	2	埴山層上	瓦	2
238	64	1d	溝1-1	鉢	5	326	156	2	溝2-6	瓦	2
239	577	1a	溝1-12	鉢	5	327	210	2	溝2-5	瓦	1
240	85	1d	溝1-59	鉢	5	328	426	2	溝2-6	瓦	2
241	11	1c	溝1-12	鉢	4	329	407	2	埴山層上	瓦	1
242	116	1a	溝1-2上面	鉢	3	330	404	2	埴山層上	瓦	1
243	114	1d	溝1-51	鉢	4	331	225	2	溝2-5	瓦	1
244	115	1d	溝1-12	鉢	4	332	405	2	溝2-5	瓦	1
245	8	1c	溝1-12	鉢	5	333	219	2	溝2-1上面	瓦	1
246	71	1d	大土坑1-1	鉢	5	334	398	2	埴山層上	瓦	1
247	9	1a	溝1-59	鉢	5	335	425	2	溝2-1	瓦	1
248	575	1a	溝1-53上面	鉢	5	336	423	2	溝2-1上面	瓦	1
249	7	1a	溝1-59	鉢	5	337	341	2	溝2-6	瓦	1
250	66	1c	溝1-53上面	樽	1	338	406	2	埴山層上	瓦	1
251	288	1c	溝1-6	樽	4	339	408	2	埴山層上	瓦	1
252	243	1c	土坑1-8	樽	2	340	217	2	溝2-1	瓦	5
253	68	1c	溝1-2上面	樽	2	341	392	2	埴山層上	瓦	4
254	244	1c	溝1-6	樽	2	342	332	2	溝2-1	瓦	4
255	242	1a	溝1-1上面	樽	2	343	331	2	溝2-1上面	瓦	1
256	34	1c	溝1-59	樽	1	344	397	2	埴山層上	瓦	1
257	547	1a	溝1-6	壺	5	345	213	2	溝2-7	瓦	1
258	267	1d	灰層土	壺	2	346	153	2	土坑2-6	瓦	2
259	258	1c	溝1-12	壺	5	347	263	2	溝2-1	瓦	2
260	286	1c	灰層土	壺	4	348	274	2	溝2-5	瓦	2
261	46	1a	大土坑1-1上面	壺	4	349	427	2	溝2-1上面	瓦	4
262	241	1a	溝1-59	壺	5	350	159	2	土坑2-5	瓦	4
263	283	1c	溝1-59	壺	4	351	180	2	土坑2-6	瓦	5
264	112	1a	溝1-2上面	壺	5	352	218	2	灰層土	瓦	5

図 番 号	実測 番号	地区	遺構・土層	器 種	残存 数	図 番 号	実測 番号	地区	遺構・土層	器 種	残存 数
353	314	2	地山遺上	握柄 漆手	5	441	431	7	溝7-1上面	握柄	5
354	181	2	土坑2-3	握柄	4	442	560	6	灰層上	ハソウ	5
355	158	2	土坑2-3	ハソウ	4	443	561	6	地山遺上	ハソウ	5
356	137	2	溝2-7	ハソウ	4	444	549	7	灰層上	ハソウ	4
357	261	2	溝2-1上面	ハソウ	1	445	436	7	灰層上	ハソウ	5
358	135	2	溝2-6	ハソウ	4	446	428	7	溝7-1上面	土師器	5
359	134	2	地山遺上	ハソウ	4	447	438	7	灰層上	土師器	5
360	136	2	地山遺上	ハソウ	4	448	435	7	灰層上	土師器	5
361	133	7	溝2-7	ハソウ	4	449	430	7	灰層上	土師器	5
362	284	2	溝2-1	土師器	2	450	429	7	灰層上	土師器	5
363	247	2	溝2-1	土師器	2	451	437	7	灰層上	土師器	2
364	311	2	灰層上	陶製紡錘車	4	452	484	6	地山遺上	土師器	5
365	211	2	溝2-6	陶製紡錘車	1	453	527	7	灰層上	土師器	5
366	139	2	地山遺上	土師器	1	454	516	7	地山遺上	土師器	5
367	265	2	溝2-1上面	土師器	1	455	518	7	溝7-1上面	土師器	5
368	264	2	溝2-1	土師器	2	456	524	7	灰層上	土師器	5
369	214	2	溝2-7	土師器	4	457	525	7	灰層上	土師器	5
370	141	2	地山遺上	土師器	1	458	522	7	灰層上	土師器	5
371	317	2	溝2-5	土師器	5	459	521	7	灰層上	土師器	5
372	319	2	溝2-1上面	土師器	5	460	519	7	溝7-1	土師器	5
373	320	2	溝2-6	土師器	5	461	375	5	灰層上	土師器	5
374	260	2	溝2-1上面	土師器	5	462	517	7	灰層上	土師器	5
375	140	2	溝2-6	土師器	4	463	548	7	灰層上	土師器	5
376	259	2	溝2-1上面	土師器	5	464	551	7	灰層上	土師器	5
377	315	2	地山遺上	土師器	4	465	552	7	灰層上	土師器	5
378	275	2	溝2-5	土師器	4	466	409	8	地山遺上	土師器	4
379	316	2	溝2-10	土師器	5	467	363	8	溝8-5	土師器	2
380	285	2	溝2-1	土師器	3	468	471	8	溝8-5	土師器	5
381	142	2	溝2-6	土師器	4	469	470	8	溝8-3	土師器	2
382	111	2	地山遺上	土師器	5	470	365	8	溝8-5	土師器	1
383	248	2	地山遺上	土師器	4	471	373	8	溝8-5	土師器	1
384	322	2	溝2-7	土師器	4	472	419	8	地山遺上	土師器	1
385	282	2	溝2-7	土師器	4	473	362	8	溝8-4	土師器	2
386	321	2	溝2-7	土師器	5	474	472	8	地山遺上	土師器	2
387	163	2	溝2-7	土師器	5	475	416	8	溝8-7	土師器	4
388	162	2	溝2-1上面	土師器	5	476	477	8	地山遺上	土師器	1
389	281	2	溝2-7	土師器	5	477	418	8	地山遺上	土師器	2
390	338	2	地山遺上	土師器	5	478	411	8	地山遺上	土師器	1
391	337	2	溝2-7	土師器	5	479	410	8	地山遺上	土師器	1
392	545	5	地山遺上	土師器	5	480	475	8	溝8-5	土師器	1
393	439	7	地山遺上	土師器	5	481	367	8	溝8-4	土師器	4
394	542	7	地山遺上	土師器	5	482	478	8	地山遺上	土師器	2
395	537	7	灰層上	土師器	5	483	370	8	溝8-5	土師器	1
396	531	7	灰層上	土師器	5	484	415	8	溝8-5	土師器	2
397	540	7	灰層上	土師器	5	485	476	8	溝8-5	土師器	1
398	462	5	溝5-1	土師器	5	486	372	8	溝8-5	土師器	2
399	460	5	灰層上	土師器	5	487	417	8	地山遺上	土師器	2
400	459	5	灰層上	土師器	2	488	380	8	溝8-4	土師器	2
401	536	7	灰層上	土師器	5	489	358	8	地山遺上	土師器	2
402	461	5	灰層上	土師器	5	490	366	8	溝8-5	土師器	2
403	543	7	灰層上	土師器	5	491	478	8	地山遺上	土師器	2
404	547	6	地山遺上	土師器	5	492	371	8	溝8-5	土師器	2
405	535	7	灰層上	土師器	5	493	368	8	溝8-5	土師器	2
406	533	7	灰層上	土師器	4	494	369	8	溝8-5	土師器	2
407	530	7	灰層上	土師器	5	495	414	8	灰層上	土師器	5
408	529	7	灰層上	土師器	5	496	359	8	溝8-4	土師器	2
409	528	7	灰層上	土師器	5	497	109	8	地山遺上	土師器	2
410	534	7	灰層上	土師器	5	498	351	8	溝8-4	土師器	5
411	544	6	地山遺上	土師器	5	499	364	8	溝8-5	土師器	1
412	465	6	地山遺上	土師器	5	500	421	8	溝8-5	土師器	1
413	466	6	灰層上	土師器	5	501	469	8	溝8-4	土師器	4
414	455	5	灰層上	土師器	5	502	468	8	溝8-4	土師器	2
415	412	7	灰層上	土師器	5	503	420	8	溝8-4	土師器	1
416	440	4	灰層上	土師器	2	504	497	8	溝8-5	土師器	4
417	432	7	灰層上	土師器	5	505	374	4	溝8-5	土師器	4
418	458	5	灰層上	土師器	5	506	513	4	溝8-1	土師器	5
419	539	7	灰層上	土師器	5	507	483	6	溝6-1	土師器	5
420	442	7	灰層上	土師器	5	508	495	6	溝6-2	土師器	5
421	445	7	灰層上	土師器	5	509	487	6	溝6-2	土師器	5
422	444	7	灰層上	土師器	5	510	480	6	溝6-2	土師器	5
423	454	5	灰層上	土師器	5	511	481	6	地山遺上	土師器	5
424	443	4	灰層上	土師器	5	512	514	4	溝4-1	土師器	5
425	446	4	灰層上	土師器	5	513	486	6	溝6-1	土師器	5
426	451	7	灰層上	土師器	5	514	479	6	灰層上	土師器	5
427	452	7	地山遺上	土師器	5	515	489	6	溝6-1	土師器	5
428	449	7	灰層上	土師器	5	516	490	6	溝6-2	土師器	5
429	448	7	灰層上	土師器	5	517	572	2	灰層上	土師器	5
430	447	7	溝7-1上面	土師器	5	518	571	2	灰層上	土師器	5
431	573	7	灰層上	土師器	5	519	379	1a	溝1-54	土師器	4
432	450	7	灰層上	土師器	5	520	493	6	溝6-1	土師器	5
433	441	7	灰層上	土師器	5	521	486	6	溝6-1	土師器	5
434	453	7	溝7-1	土師器	2	522	495	6	地山遺上	土師器	5
435	556	7	灰層上	土師器	4	523	494	6	溝6-1	土師器	5
436	555	7	灰層上	土師器	5	524	491	6	溝6-1	土師器	5
437	463	6	灰層上	土師器	5	525	509	5	灰層上	土師器	5
438	433	7	灰層上	土師器	5	526	492	6	灰層上	土師器	5
439	434	7	灰層上	土師器	5	527	507	5	溝5-1上面	土師器	5
440	432	7	灰層上	土師器	5	528	506	5	灰層上	土師器	5

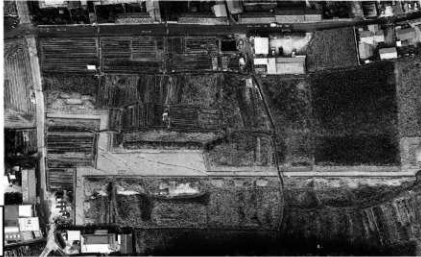
図 番号	実測 番号	地区	遺構・土層	器 種	残存 率	図 番号	実測 番号	地区	遺構・土層	器 種	残存 率
529	497	6	溝6-1	土師黄斑釜	5	560	619	6	溝6-1	中国製青花碗	5
530	498	6	灰層土	東洋赤子リ鉢	5	561	620	7	灰層土	肥前磁器赤付碗	5
531	501	6	溝6-1	東洋赤子リ鉢	5	562	620	7	灰層土	肥前磁器赤付碗	5
532	500	6	溝6-1	東洋赤子リ鉢	5	563	581	3	灰層土	肥前磁器赤付碗	5
533	499	6	溝6-1	東洋赤子リ鉢	5	564	623	3	灰層土	肥前磁器赤付碗	5
534	512	5	雑草	瓦葺子リ鉢	5	565	583	3	灰層土	青戸漆器赤付碗	5
535	505	6	灰層土	土師黄斑	5	566	598	5	灰層土	肥前磁器赤付碗	5
536	511	5	溝5-1	土師黄斑	5	567	618	6	灰層土	肥前磁器赤付碗	5
537	504	6	灰層土	土師黄斑	5	568	624	3	灰層土	肥前磁器赤付碗	5
538	503	6	灰層土	土師黄斑	5	569	582	3	灰層土	肥前磁器赤付碗	5
539	502	6	灰層土	土師黄斑	5	570	613	2	灰層土	肥前磁器赤付碗	5
540	566	6	灰層土	唐草紋新平瓦	5	571	590	3	灰層土	唐津焼	5
541	564	6	灰層土	唐草紋新平瓦	5	572	610	3	灰層土	唐津焼陶器目文皿	5
542	378	1d	灰層土	巴紋新瓦	5	573	595	6	灰層土	唐津焼	5
543	563	5	溝5-1上面	軒瓦	5	574	380	1a	灰層土	唐津焼磁皿	5
544	567	6	灰層土	瓦葺	5	575	609	3	灰層土	唐津赤磁赤付碗	5
545	562	2	地山面上	瓦葺	5	576	588	6	灰層土	唐津焼	5
546	569	7	灰層土	平瓦	5	577	612	2	灰層土	唐津焼	5
547	561	5	溝5-1上面	平瓦	5	578	589	6	灰層土	瀬戸赤磁赤付碗	5
548	565	6	灰層土	平瓦	5	579	488	6	溝6-1上面	丹波焼磁皿	5
549	568	7	灰層土	平瓦	5	580	607	6	地山面上	京焼茶灯明器皿	5
550	570	7	灰層土	平瓦	5	581	585	3	溝3-1	京焼茶灯明器皿	5
551	593	6	灰層土	中国製青花皿	5	582	625	5	層土	京焼茶灯明器皿	4
552	591	6	灰層土	中国製青花碗	5	583	621	6	層土	加工白磁	1
553	611	6	灰層土	中国製青花碗	5	584	617	2	灰層土	加工白磁	1
554	592	6	灰層土	中国製白磁碗	5	585	615	3	灰層土	唐津焼	5
555	614	2	灰層土	中国製青花碗	5	586	584	3	灰層土	唐津焼	5
556	600	5	土坑5-2	肥前磁器赤付碗	5	587	604	7	灰層土	唐津赤磁三島手鉢	5
557	599	5	溝5-1	肥前磁器赤付碗	5	588	605	7	灰層土	丹波焼	5
558	602	7	灰層土	肥前磁器赤付碗	5						
559	622	2	灰層土	肥前磁器赤付碗	5						

残存率 1: 実形・ほぼ実形 2: 石青補填で実形
3: 石青補填で半実形 4: 1/2以上の破片
5: 1/2以下の小破片

版 圖



図版 1



1区・2区



1c~e区



1a区



2区

図版2



3区-4区



5区



6区

図版3

7区



5~7区



8区

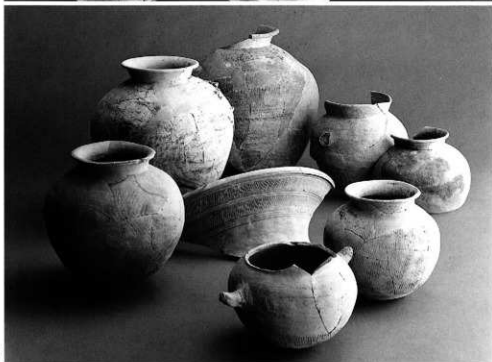


図版4

杯など (8区)



甕など (1・2区)



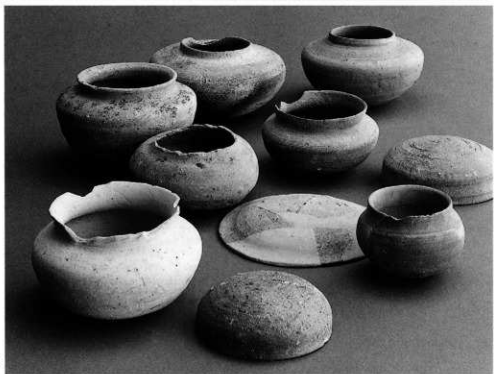
横瓶など (1・2区)



図版5



高环など (1・2区)



壺など (1・2区)



ハソウなど (1・2区)

図版6

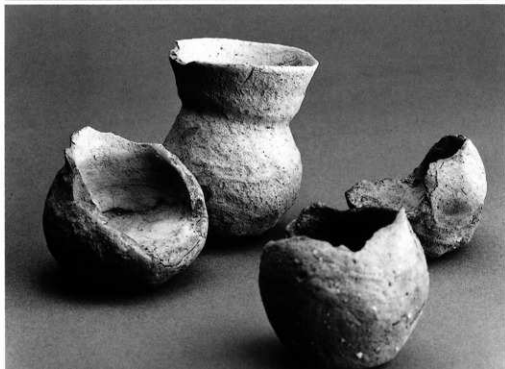
鉢など (1・2区)

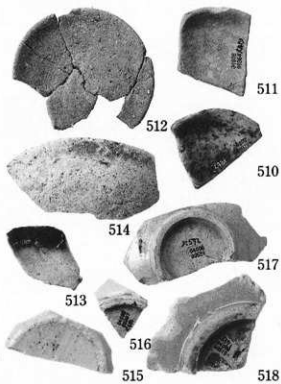
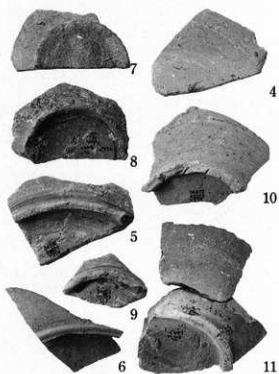
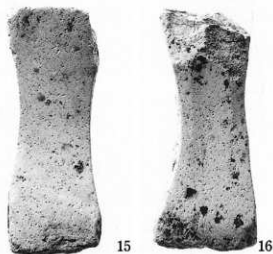
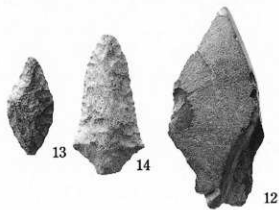
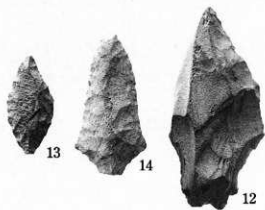


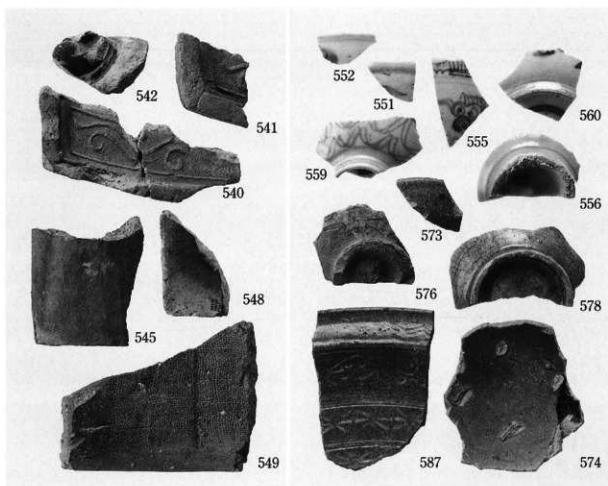
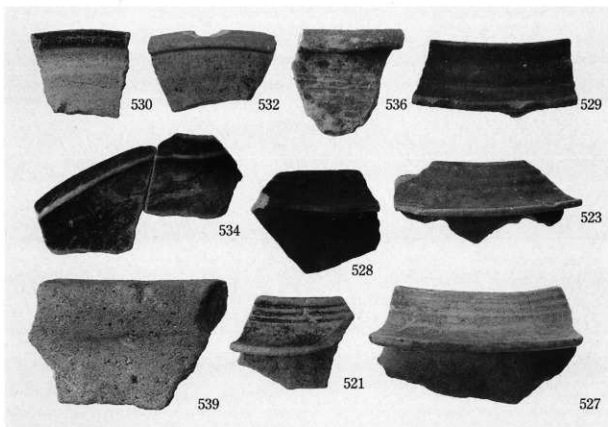
乾燥台など (1・2区)



土師器小壺など (1・2区)







報告書抄録

ふりがな	とうきせんづか・とうきいせきはつかつちようさがいよう・Ⅱ							
書名	陶器千塚・陶器遺跡発掘調査概要・Ⅱ							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	西川寿勝・渡辺晴香・佐々木健太郎							
編集機関	大阪府教育委員会 文化財保護課							
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 TEL 06-6941-0351(代表)							
発行年月日	2006年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 〇〇° 〇〇′ 〇〇″	東経 〇〇° 〇〇′ 〇〇″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
とうきいせき 陶器遺跡	おおさかふよかしとうききた 大阪府堺市陶器北	27201	183	34° 31′ 04″	135° 31′ 20″	2004年6 月10日～2 005年3月 25日まで	1,440m ²	府営ほ場 整備事業 陶器北地 区に伴う 調査
とうきせんづか 陶器千塚	おおさかふよかしとうききた 大阪府堺市陶器北	27201	130	34° 31′ 02″	135° 31′ 15″	2004年6 月10日～2 005年3月 25日まで	860m ² 合計 2,300m ²	
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
とうきいせき 陶器遺跡	集落	古墳時代後期・室町 ～江戸時代		溝・区画溝・ 土坑		須恵器・土師 器・陶磁器		須恵器工人関連集 落・陶器藩関連遺構?
とうきせんづか 陶器千塚	古墳	古墳時代後期		溝・土坑		須恵器・土師 器・陶磁器		須恵器工人関連 集落

陶器千塚・陶器遺跡発掘調査概要・Ⅱ

発行 大阪府教育委員会
 〒540-8571
 大阪市中央区大手前2丁目
 TEL 06-6941-0351
 発行日 2006年3月31日
 印刷 (株)近畿印刷センター
 〒582-0001
 大阪府柏原市本郷5丁目6番25号

